

茨城県教育財団文化財調査報告第151集

荒川本郷地区特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書II

実穀寺子遺跡 2

作業室用

平成 11 年 3 月

住宅・都市整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第151集

荒川本郷地区特定土地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

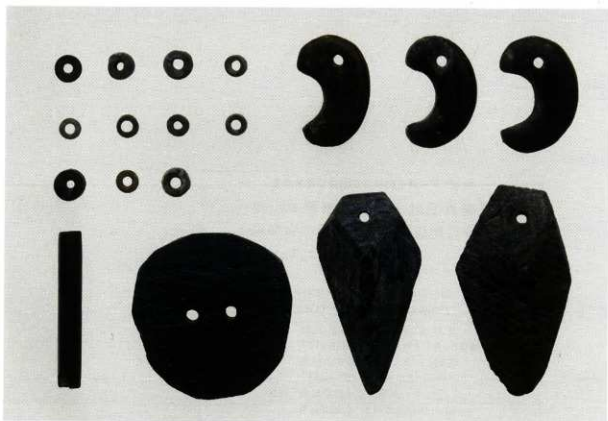
じっこくてらこ
実穀寺子遺跡 2

平成 11 年 3 月

住宅・都市整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団



第1 (上方)・2 (手前)号方形周溝墓



第53号住居跡出土遺物 (石製品)

序

阿見町と住宅・都市整備公団は、良好な住環境を有する住宅の供給を行うための特定土地区画整理事業を進めております。その事業予定地内の荒川本郷地区には、実穀古墳群、実穀寺子遺跡及び実穀寺子西遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成7年度から平成10年度にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成10年9月から平成10年12月に調査を行った実穀寺子遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた多大な御協力に対し、心から感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成11年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋 本 昌

例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成10年9月から平成10年12月まで発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町実穀字寺子1546番地の7ほかに所在する実穀寺子遺跡^{ホウキツコ}2の発掘調査報告書である。
- 2 実穀寺子遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光	平成7年4月～	
	川 俣 勝 慶	平成10年4月～	
常 務 理 事	齋 藤 紀 彦	平成9年4月	
事 務 局 長	西 村 敏 一	平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	鈴 木 三 郎	平成10年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	池 田 晃 一	平成10年4月～
	主 任	川 崎 敦 司	平成10年4月～(平成10年4月～9月主事)
経 理 課	課 長	佐 藤 健	平成10年4月～
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	清 水 薫	平成10年4月～
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
	主 任	木 下 光 保	平成10年4月～
調 査 第 一 課	課 長(部長兼務)	沼 田 文 夫	平成8年4月～
	調 査 第 三 班 長	田 所 則 夫	平成10年9月～
	主 任 調 査 員	宮 崎 修 士	平成10年9月～平成10年12月 調査
			平成11年1月～平成11年3月 整理・執筆・編集
	主 任 調 査 員	柴 田 博 行	平成10年9月～平成10年12月 調査 平成11年1月～平成11年3月 整理・執筆・編集
整 理 課	課 長	川 井 正 一	平成10年4月～
	首 席 調 査 員	萩 野 谷 悟	平成10年4月～

- 3 本書の作成にあたり、第1章、第3章第3節1・2は柴田、第2章～第3章第2節、第3節3～5、第4節は宮崎がそれぞれ執筆した。編集は、二人で行った。
- 4 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 5 本書の作成にあたり、方形周溝墓の性格については、東邦大学付属中・高等学校教諭山岸良二氏に御指導をいただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

7 遺跡の概略

ふりがな	あらかわほんごうちとくていとうちかくせいのちかきせうぶかおちようほくにしよ							
書名	荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	実殺寺子遺跡2							
巻次	II							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第151集							
著者名	宮崎修士 柴田博行							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	1999 (平成11) 年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
実殺寺子遺跡 (AⅢ・IV区, C区)	茨城県稲敷郡 阿見町実殺寺 寺子566番地の7ほか	08443	36度 00分 34秒	140度 11分 22秒	23 ～ 24 m	19980901 ～ 19981231	14,539㎡	荒川本郷地区 特定土地区画 整理事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
実殺寺子遺跡 (AⅢ・IV区, C区)	包蔵地	旧石器時代			石器 (剥片, 削器)		古墳時代中期 の集落及び墓 跡である。	
		縄文時代			縄文土器(深鉢) 石器 (石鏃)			
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 方形竪穴状遺構 土坑	4軒 1基 11基	土師器 (坏・碗・ 高杯・埴・甕・壺 ・甗), 土製品(土 玉), 石製品(双孔 円板・筒形品・勾 玉・白玉・紡錘車), 鉄製品(鏃・鏃)			
	墓跡	古墳時代	方形周溝墓	2基	土師器(碗・高坏・ 坏・埴・甕・壺・手 捏土器), 礫			
その他	時期不明	土坑	1基					

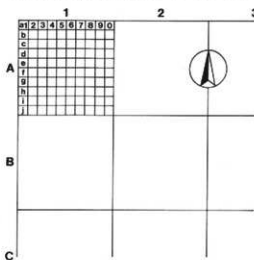
凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、実穀寺子遺跡は、 $X=1,160\text{m}$ 、 $Y=32,000\text{m}$ の交点を基準点（A1a）とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…、とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。

さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2ba区」のように呼称した。（第1図）



第1図 調査区呼称方法概念図

また、当遺跡はこれまでの調査の過程で、地形からA～C区に分けられている（第3図）。遺跡は、乙戸川の低地から北東に向かって入る谷津沿いに展開しており、この谷津の南東部をA区、北東部すなわち谷頭の奥をC区、A区とC区間の小支谷に囲まれた所をB区としている。I～IVの番号は便宜上の地区割りであり、遺構分布状況等によるものではない。

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 方形竪穴状遺構-SX 方形周溝墓-TM 土坑-SK 柱穴-P

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-TP

土層 攪乱 K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示

□ = 埴 □ = 焼土 □ = 粘土 □ = 赤彩

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 — — — 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- 遺構全体図は縮尺250分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。
- 住居跡の「主軸方向」は、埴と出入口部を通る軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向に、何度ふれているかを、例えば「N-10°-E」のように表示した。手掛かりがない場合は南北に近い軸線を主軸と見なした。方形竪穴状遺構は長軸を主軸と見なした。

なお、[] を付したものは推定である。

- 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径とし、単位はcmである。なお、現存値は

()で、推定値は[]を付して示した。

- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測番号(P, D, P, Q, M)、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。
- (6) 写真図版中の遺物に付した番号は挿図と遺物の番号である。
- (7) 土器の編年については、櫻村宣行氏の「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」(『研究ノート5号』茨城県教育財団)に基づいた。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 実穀寺子遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10
2 方形竪穴状遺構	28
3 方形周溝墓	30
4 土坑	34
5 遺構外出土遺物	42
第4節 まとめ	45

插图目次

第1图	调查区称呼方法概念图	
第2图	尖穀寺子遺跡周辺遺跡分布图	7
第3图	尖穀寺子遺跡調査区劃分图	8
第4图	基本土層图	9
第5图	第53号住居跡実測区	11
第6图	第53号住居跡出土遺物実測区(1)	12
第7图	第53号住居跡出土遺物実測区(2)	13
第8图	第54号住居跡実測区	16
第9图	第54号住居跡出土遺物実測区(1)	17
第10图	第54号住居跡出土遺物実測区(2)	18
第11图	第55号住居跡出土遺物実測区	20
第12图	第55号住居跡実測区	21
第13图	第56号住居跡実測区(1)	24
第14图	第56号住居跡実測区(2)	25
第15图	第56号住居跡出土遺物実測区	26
第16图	第1号方形竪穴状遺構実測区	28
第17图	第1号方形竪穴状遺構出土遺物実測区	29
第18图	第1号方形周溝墓実測区	31
第19图	第1号方形周溝墓出土遺物実測区	32
第20图	第2号方形周溝墓実測区	33
第21图	第2号方形周溝墓出土遺物実測区	33
第22图	第103号土坑·出土遺物実測区	34
第23图	第104号土坑·出土遺物実測区	35
第24图	第105号土坑·出土遺物実測区	36
第25图	第106号土坑·出土遺物実測区	37
第26图	第110号土坑·出土遺物実測区	39
第27图	第115号土坑·出土遺物実測区	41
第28图	第108·109·111·112·113·114号土坑実測区	42
第29图	遺構外出土遺物実測区	43
付图	尖穀寺子遺跡AIV区全体图	

表 目 次

表1 実教寺子遺跡周辺遺跡一覽表……………6	表3 実教寺子遺跡土坑一覽表……………42
表2 実教寺子遺跡住居跡一覽表……………27	

写真図版目次

巻 頭 第1(上方)・2(手前)号方形周溝墓 第53号住居跡出土遺物(石製品)	
P L 1 実教寺子遺跡風景(南から北方向を望む) 実教寺子遺跡IV区全景	P L 5 第53・54号住居跡出土遺物
P L 2 第53・54・56号住居跡、第53・54・55号住居跡 遺物出土状況、第54・55号住居跡貯蔵穴遺 物出土状況	P L 6 第54・55・56号住居跡出土遺物
P L 3 第56号住居跡・第1号方形竈穴状遺構・ 第1・2号方形周溝墓・第104号土坑遺物出 土状況、第1号方形竈穴状遺構・第1号 方形周溝墓・第105号土坑	P L 7 第56号住居跡・第1号方形竈穴状遺構 出土遺物
P L 4 第53号住居跡出土遺物	P L 8 第1・2号方形周溝墓・第103・104・105・106 ・110・115号土坑出土遺物
	P L 9 第53・54・56号住居跡・第106号土坑・遺構外 出土遺物
	P L 10 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

阿見町と住宅・都市整備公団は、荒川本郷地区において良好な住環境を有する住宅の供給を行うための特定土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月1日、住宅・都市整備公団つくば開発局は、茨城県教育委員会あてに事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は、同6年11月2日～8日に現地踏査、11月28日～12月2日に試掘調査を実施し、平成7年2月20日に、実穀寺子遺跡、実穀古墳群、北古辺古墳、実穀寺子西遺跡が所在することを、住宅・都市整備公団つくば開発局に回答した。茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団つくば開発局は、遺跡の取り扱いについて、慎重な協議を重ね、その結果、茨城県教育委員会は、同年3月9日、記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団つくば開発局から遺跡の発掘調査の依託を受け、平成7年10月から発掘調査を開始した。平成7年度は実穀寺子遺跡(AⅠ区)2,291㎡、実穀古墳群9,050㎡、平成8年度は実穀寺子遺跡(AⅡ区、BⅠ区)25,750㎡、平成9年度は実穀寺子遺跡(AⅢ区)2,820㎡、実穀寺子西遺跡21,751㎡の調査を実施した。実穀寺子遺跡(AⅠ～AⅢ区、BⅠ区)、実穀古墳群については、平成10年度整理作業を実施しており、「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」（「茨城県教育財団文化財調査報告第144集」）として、報告書が刊行されることになっている。

平成10年3月1日、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団茨城地域支社（つくば開発局からの改組による）は、平成10年度の実穀寺子西遺跡1,893㎡、実穀寺子遺跡(AⅢ区の一部、AⅣ区、C区)14,539㎡の取り扱いについて慎重な協議を行った。その結果、茨城県教育委員会は同年3月13日、記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年6月30日、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団茨城地域支社は、当初の予定である同年7月1日から翌年3月31日の発掘調査期間の変更について協議を行い、その結果、調査期間は同年9月1日から翌年3月31日までと決定した。茨城県教育財団は住宅・都市整備公団と発掘調査についての委託契約を結び、同年9月1日、調査を開始した。しかし、調査が予定より早期に終了する見込みになったため、同年11月17日、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団茨城地域支社は、事業の円滑な推進を勘案して発掘調査計画の変更について協議を行った。その結果、3か月短縮の旨回答があり、茨城県教育財団は、同年12月で実穀寺子西遺跡、実穀寺子遺跡(AⅢ区の一部、AⅣ区、C区)の調査を終了した。

第2節 調査経過

実穀寺子遺跡(AⅢ区の一部、AⅣ区、C区)の発掘調査は、平成10年9月1日から平成10年12月31日までの4か月間実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

平成10年度

9月1日には現場事務所への発掘器材や物品の搬入など、発掘調査の諸準備を行った。3日から室内補助員を、11日からは調査補助員を雇用し、C区に2m幅のトレンチを設定して手掘りによる試掘調査を開始した。また、25日にはAⅢ区(本年度分)とAⅣ区の清掃作業を行った。

- 10月 2日からはAⅢ区(本年度分)とAⅣ区の重機による表土除去を開始し、15日の終了までに住居跡5軒、方形溝溝底2基及び土坑十数基を確認した。28日から遺構の掘り込み作業を開始した。
- 11月 前月に引き続き、AⅢ区(本年度分)とAⅣ区の遺構調査を進めた。16日には、8分の1まで進めていたC区の試掘を重機により再開した。試掘は4分の1まで行ったが、遺物は少なく、遺構は検出されなかったため調査を終了した。
- 12月 1日に住宅・都市整備公園及び阿見町教育委員会に対して発掘調査の成果を報告した。2日に報道発表を行い、5日午前には雨の中55名の参加者を集めて現地説明会を開催した。9日には、セスナ機での航空写真撮影を行った。11日から補足調査を行い、18日までには安全対策を含め現地調査をすべて終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

実穀寺子遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町実穀寺字寺1546番地の7はかに所在する。阿見町南西部、JR常磐線荒川沖駅から南東に約3kmほどの位置である。

遺跡が所在する阿見町は、面積64.68km²を擁し、東西9km、南北11kmのひろがりをもつ。北部は霞ヶ浦に面し、東部は稲敷郡美浦村、南部は稲敷郡江戸崎町及び牛久市、西部は土浦市と接している。

阿見町の地形は、常総台地の一部をなす稲敷台地東北部と、清明川、桂川、乙戸川、花室川、及び霞ヶ浦沿岸の沖積低地とからなっている。

稲敷台地は、標高25～28mの洪積台地であり、土浦市、龍ヶ崎市、江戸崎町を結ぶ三角地帯の中にその大部分が入り、台地の東端は東町阿波崎付近にある。台地の地層は、第四期洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤となり、下部から上部にかけて、成田層下部、成田層上部、龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単調、褶曲や断層はみられない。台地面は上記の四河川によって開折され、複雑な樹枝状の支谷が刻まれている。両遺跡近くを流れる乙戸川は、土浦市の乙戸沼を水源とし、井の岡で桂川を合わせ、烏田付近で小野川と合流し、霞ヶ浦に流入する。

実穀寺子遺跡は、乙戸川の低地から延びる支谷の東側台地上に立地する。遺跡のある台地上と、乙戸川の河岸に開ける水田との比高は約7mである。調査前の現況は畑、山林、雑種地である。

《参考文献》

- ・阿見町史編さん委員会 『阿見町史』阿見町 1983年 3月
- ・茨城県農地部農地課 『土地分類基本調査 土浦』 1983年 12月
- ・峰須紀夫 『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1986年 11月

第2節 歴史的環境

実穀寺子遺跡〈1〉の所在する地域は、河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境をもち、台地上には数多くの遺跡が残っている。特に、小野川、乙戸川流域の台地上には、旧石器時代からの遺跡が分布している。ここでは、当地域の主な遺跡について時代をおって述べることにする。

旧石器時代の遺跡では、阿見町の⁵⁵²⁵実穀古墳群〈2〉で細石刃が、牛久市の⁹⁴⁰¹中久喜遺跡〈3〉、⁶⁵西ノ原遺跡〈4〉、土浦市の⁴⁴⁰⁰宮前遺跡、今回報告する実穀寺子遺跡でナイフ形石器などが出土している。

縄文時代の遺跡は、牛久市の⁴¹⁰⁰守子橋遺跡〈5〉、ヤツノ上遺跡〈6〉、⁹⁴⁰¹東山遺跡〈7〉、⁶⁵馬場遺跡〈8〉、⁶⁵出山遺跡、土浦市の⁴⁴⁰⁰沖新田遺跡、⁴⁴⁰⁰神前遺跡〈9〉、⁷⁰⁰塚下遺跡〈10〉などがある。ヤツノ上遺跡からは、縄文時代晩期の土器片とともに、同時期の土偶が出土し、東山遺跡からは、縄文時代早期から中期の土器片が出土している。馬場遺跡からは、縄文時代早期の土器片と前期の深鉢が出土している。阿見町の⁶¹⁰⁰於山遺跡〈11〉からは、縄文時代早期から後期にかけての土器片、磨製石斧が出土している。牛久市奥原町の乙戸川と小野川が合流する左岸台地縁辺部には、縄文中期から後期にかけての集落跡である⁶⁵戸遺跡がある。

弥生時代の遺跡は、土器片の散布が見られる阿見町の遺記遺跡(12)と、牛久市の坂本遺跡(13)がある。また、牛久市奥原町の天上峯遺跡では、弥生時代後期の集落跡が検出されている。

古墳時代の遺跡は、今回報告する実穀寺子遺跡のほかに、阿見町の実穀古墳群、実穀寺子西遺跡(14)、中根遺跡(15)、遺記遺跡、下小池遺跡(16)、下小池東遺跡(17)、福田遺跡(18)、宮脇遺跡(19)、阿見東遺跡がある。また、牛久市では、中下根遺跡(20)、西ノ原遺跡、単人山遺跡(21)、中久喜遺跡、馬場遺跡、行人田遺跡(22)、ヤツノ上遺跡、東山遺跡、大久保遺跡(23)、姥神遺跡、すかき台遺跡、源臺遺跡、天上峯遺跡、土浦市では、向原遺跡、烏山遺跡、鹿ヶ崎市では、平台遺跡、長峰遺跡などがある。

これらの遺跡を時期別に見ると、古墳時代前期の遺跡は、すかき台遺跡、姥神遺跡、源臺遺跡、向原遺跡、烏山遺跡などがあり、乙戸川沿いの下小池遺跡では、前期から後期にわたる13軒の竪穴住居跡が検出されている⁽²⁾。小野川と乙戸川の合流する左岸台地縁辺部に位置する牛久市奥原町のすかき台遺跡では、竪穴住居跡9軒、同じく姥神遺跡では、竪穴住居跡28軒、方形周溝墓3基が検出されている。乙戸川左岸台地上に位置する牛久市久野町の源臺遺跡からは、6基の方形周溝墓と円形周溝墓が検出されている⁽³⁾。

古墳時代中期の遺跡は、阿見町木郷から小池付近を流れる乙戸川沿いに、実穀寺子遺跡、実穀古墳群、実穀寺子西遺跡、下小池遺跡などが、乙戸川と小野川に挟まれた台地上に、中下根遺跡、西ノ原遺跡、単人山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡があり、広範囲にわたって集落跡が検出されている。これらの遺跡は、小支谷を望む台地の中央から緩斜面上にかけて、古墳時代中期中葉から後期初頭の集落を形成しているという特徴を持っている。阿見町阿見に所在する阿見東遺跡第一地点では、古墳時代後期の住居跡を含む10軒の住居跡が検出され、このうち、第3号住居跡からは、石製模造品が床面から多く出土していることから、石製模造品の工房跡ではないかと考えられている。阿見町北西部の清明川によって開析された台地上に位置する宮脇遺跡からは、同時期の竪穴住居跡24軒が検出され、下小池遺跡では、11軒の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代後期の遺跡は、西ノ原遺跡、馬場遺跡、天王峯遺跡、姥神遺跡などがある。馬場遺跡では、竪穴住居跡2軒、天王峯遺跡では2軒、姥神遺跡では44軒が検出されている⁽⁷⁾。

古墳は集落跡に隣接するように所在し、当遺跡南西側の実穀古墳群、阿見町の内記古墳群(24)、だめき古墳(25)、北古辺古墳(26)、於山古墳、縁越古墳群(27)、牛久市の道山古墳群(28)が確認されている。実穀古墳群の第4号墳と道山古墳群の第3・4・5号墳からは直刀が出土している。その他、小野川沿いに、宮坂古墳(29)、愛宕脇古墳(30)、琴塚古墳(31)、水落下古墳(32)、梨の木小墳(33)がある。これらの古墳は、いずれも6世紀後半から7世紀前半のものである。

奈良・平安時代の遺跡は、中下根遺跡、単人山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡、姥神遺跡、行人田遺跡がある。このうち、ヤツノ上遺跡では平安時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟が、姥神遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡16軒、平安時代の竪穴住居跡58軒及び掘立柱建物跡4棟が検出されている⁽⁸⁾。

中世の遺跡は、上小池城跡(34)、阿見城跡(35)、小坂城跡などがある。阿見町小池に所在する上小池城跡は、戦国時代末期に土岐氏によって構築されたものと考えられている。

近世の遺跡としては、土浦市の荒川神一里塚、牛久市の東窟穴一里塚などがある。

近代以降では、霞ヶ浦西岸に、第2次世界大戦中に海軍の重要な拠点となった霞ヶ浦航空隊跡がある。当遺跡南西側の実穀寺子西遺跡では、アメリカ軍機を迎撃するための高射砲台跡が検出され、平成9・10年度に5基が調査された。当時の軍の施設を知る貴重な遺構である。

以上のように、当遺跡の周辺には多くの遺跡が存在している。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図中の該当番号と同じである。

註

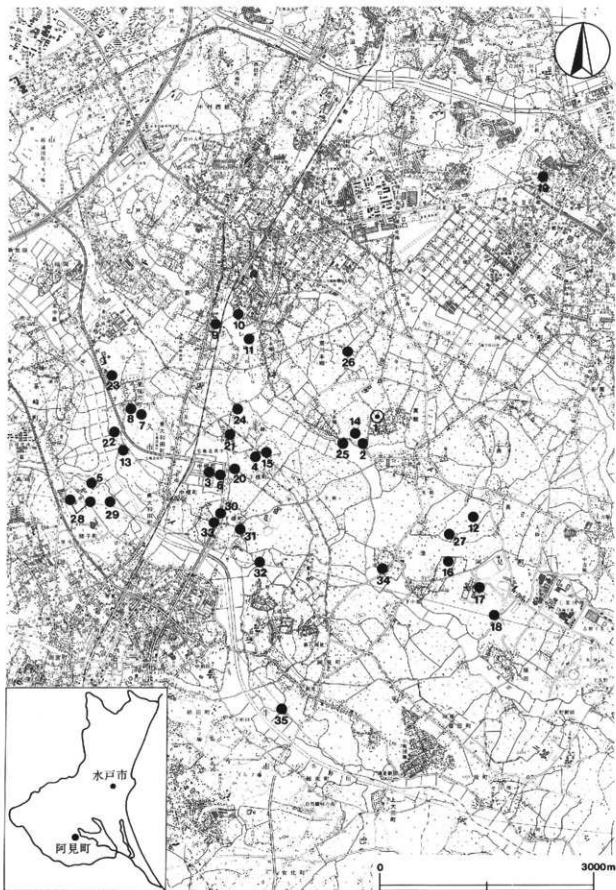
- (1) 茨城県教育財団 「主要地方道上浦江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 於山遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第96集』 1995年3月
- (2) 阿見町教育委員会 「下小池東遺跡発掘調査報告書」 1979年3月
阿見町教育委員会 「下小池東遺跡第12号第13号住居址発掘調査報告書」 1981年1月
- (3) 牛久市すかき台発掘調査会 「すかき台遺跡」 1991年8月
- (4) 牛久市教育委員会 「常陸源菜遺跡」 1989年10月
- (5) 阿見東遺跡調査会 「阿見東遺跡」 1992年5月
- (6) 阿見町教育委員会 「宮脇遺跡(第II期)」 1990年3月
- (7) 茨城県教育財団 「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 馬場遺跡・行人田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』 1996年3月
- (8) 茨城県教育財団 「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(1) ヤツノ上遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第81集』 1993年3月

参考文献

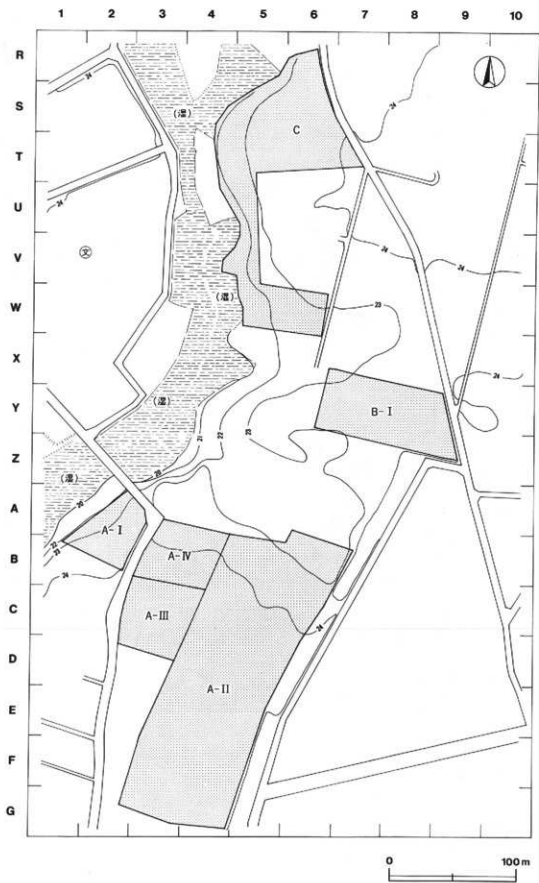
- ・阿見町史編さん委員会 「阿見町史」 1983年3月
- ・牛久市教育委員会 「牛久市史料編(一)」 1979年1月
- ・草崎村教育委員会 「基礎村史」 1973年3月
- ・奥原遺跡発掘調査会 「奥原遺跡」 1989年12月
- ・牛久市天王峯発掘調査会 「天王峯遺跡報告書第二次調査」 1988年4月
- ・土浦市向原遺跡発掘調査会 「向原遺跡」 1987年3月
- ・国十箇大学文学部考古学研究室 「烏山遺跡」 1988年3月
- ・茨城県教育財団 「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II) 中久喜遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第86集』 1993年9月
- ・茨城県教育財団 「牛久東下根特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡・西ノ原遺跡・華人山遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第113集』 1996年6月
- ・茨城県教育財団 「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(III) 東山遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第101集』 1995年9月
- ・茨城県教育財団 「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 馬場遺跡・行人田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』 1996年3月
- ・茨城県教育財団 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8 平台遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第19集』 1983年3月
- ・茨城県教育財団 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第58集』 1990年3月

表1 実穀寺子遺跡周辺遺跡一覧表

國中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						國中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						
			田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世				近・現代	田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世
①	実穀寺子遺跡		○	○	○				19	宮脇遺跡	5658			○	○	○		
2	実穀古墳群	5697	○			○			20	中下根遺跡				○	○	○		
3	中久谷遺跡	5697	○			○	○		21	牛人山遺跡					○	○		
4	西ノ原遺跡		○			○			22	行人田遺跡	3365				○	○		
5	守子橋遺跡	2794		○					23	大久保遺跡	3363				○			
6	ヤツノ上遺跡			○		○	○		24	内記古墳群	5702			○				
7	東山遺跡			○		○	○		25	だめき古墳	5698			○				
8	馬場遺跡	3364	○		○	○			26	北古辺古墳	5700			○				
9	沖新山遺祖神前遺跡	5241	○		○				27	塚越古墳群	5705			○				
10	塚下遺跡	5240	○						28	道山古墳群	1706			○				
11	於山遺跡			○		○			29	宮坂古墳	3368			○				
12	道記遺跡	5704	○	○	○				30	愛宕脇古墳	3372			○				
13	坂本遺跡	3366	○	○					31	琴塚古墳群	3377			○				
14	実穀寺子西遺跡				○		○		32	水落下古墳	3378			○				
15	中根遺跡	5703			○				33	梨の木古墳	3373			○				
16	下小池遺跡	3975	○		○				34	上小池城跡	3982						○	
17	下小池東遺跡	3976	○		○				35	岡見城跡	1708						○	
18	榎田遺跡	5706	○		○	○												



第2図 実教寺子遺跡周辺遺跡分布図



第3図 実教寺子遺跡調査区割図

第3章 実穀寺子遺跡

第1節 遺跡の概要

実穀寺子遺跡は、阿見町北西部、乙戸川左岸の標高22~24mの台地上にあり、乙戸川の低地から伸びる支谷によって、大きく南部(A区)と北部(B・C区)の二つの地区に分かれている。現況は山林及び畑地であり、平成7年度にA1区の2,291㎡、平成8年度にAII区の21,083㎡とB区の4,667㎡、平成9年度にAIII区の2,820㎡、平成10年度にAIII区154㎡、AIV区3,255㎡とC区11,130㎡を調査した。当遺跡は古墳時代中期の集落跡を中心とした、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の複合遺跡である。同じ台地上の300mほど南西に、実穀古墳群及び実穀寺子西遺跡がある。

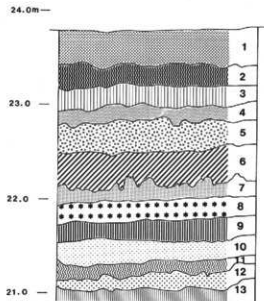
今回報告するAIV区からは、古墳時代中期の竪穴住居跡4軒、方形竪穴状遺構1基、方形周溝墓2基、土坑11基及び時期不明の土坑1基が検出された。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に16箱出土しており、大半は古墳時代中期のものである。旧石器時代の剥片、縄文時代の縄文土器(深鉢片)、石器(石鎌)、古墳時代の土師器(高坏・坏・碗・埴・甕・瓶・手捏土器)、土製品(土玉)、石製模造品(双孔円版・剣形品・白玉・管玉)、石製品(勾玉・紡錘車・砥石)、鉄製品(鎌・鉄)がある。

第2節 基本層序

平成8年度の調査において、調査区内(II区)にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。観察の結果は以下の通りである(第4図)。遺構は、第2層上面で確認した。

- 第1層 厚さ18~26cmの褐色の表土である。
- 第2層 厚さ18~24cmの明褐色土。新期富士降下火砕層(新期テフラ)を含む層である。
- 第3層 厚さ18~24cmの褐色土。赤色スコリアを微量含む腐植土層である。
- 第4層 厚さ8~20cmの明褐色のソフトローム層。
- 第5層 厚さ24~38cmの褐色のハードローム層。下に始良Tn火山灰(AT)を含む層である。
- 第6層 厚さ22~42cmの褐色土。赤色スコリアを微量含む第2黒色帯(BBII)である。
- 第7層 厚さ10~26cmの褐色土。ローム小ブロックを中量含む。
- 第8層 厚さ20~26cmのふい褐色土。黒色粒子を微量含む。
- 第9層 厚さ16~23cmの褐色土。黒色粒子を少量、赤色スコリアを微量含む、極めて粘性がある。
- 第10層 厚さ20~26cmのふい褐色土。白色粘土粒子を多量、黒色粒子・赤色粒子を少量含む。



第4図 基本土層図

- 第11層 厚さ10～16cmのにおい褐色土。粘土粒子を極めて多量に、赤色粒子を多量、黒色粒子を少量含む。
- 第12層 厚さ10～24cmのにおい棕色土。粘土中ブロック・粒子を中量、黒色粒子を少量含む、極めて粘着がある。
- 第13層 におい褐色土。赤色小ブロック・黒色粒子を中量含む。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査で、竪穴住居跡4軒(SI-52はSX-1に変更)を検出した。以下、遺構と遺物について記載する。

第53号住居跡（第5・6・7区）

位置 調査AIV区南東部，B4g4区。

規模と平面形 長軸6.02m，短軸5.98mの方形である。

主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は22～33cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。また、P₁、P₂とP₄の外側に踏み固められた不定形の高まりがある。

貯蔵穴 西コーナー部に位置し、長径96cm，短径85cmの楕円形で、深さは32cmである。底面は凹凸である。

貯蔵穴土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子小量，ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量，ローム大・中ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量 |

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁～P₄は、長径52～66cm，短径47～53cmの楕円形、深さは35～68cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は、長径40cm，短径30cmの楕円形、深さは24cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は、長径34cm，短径27cmの楕円形、深さは26cmで、P₂の南西に位置し、P₂の補助柱穴と考えられる。

炉 2か所。炉1は北東壁寄りに位置し、長径96cm，短径71cmの楕円形で、床面を7cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は、赤変硬化している。炉2は中央に位置し、長軸74cm，短軸46cmの長方形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は、赤変硬化している。炉1は、炉2より炉床が赤変硬化していることから長期間使用されていたと思われる。

炉1土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-----------------------------|---|--------|------------------------------|
| 1 | におい赤褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | におい赤褐色 | 焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量，焼土ブロック微量 |
| 2 | におい赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量・炭化粒子微量 | | | |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子，焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量 | 5 | 暗赤褐色 | ローム粒子，炭化粒子小量，焼土粒子微量 |

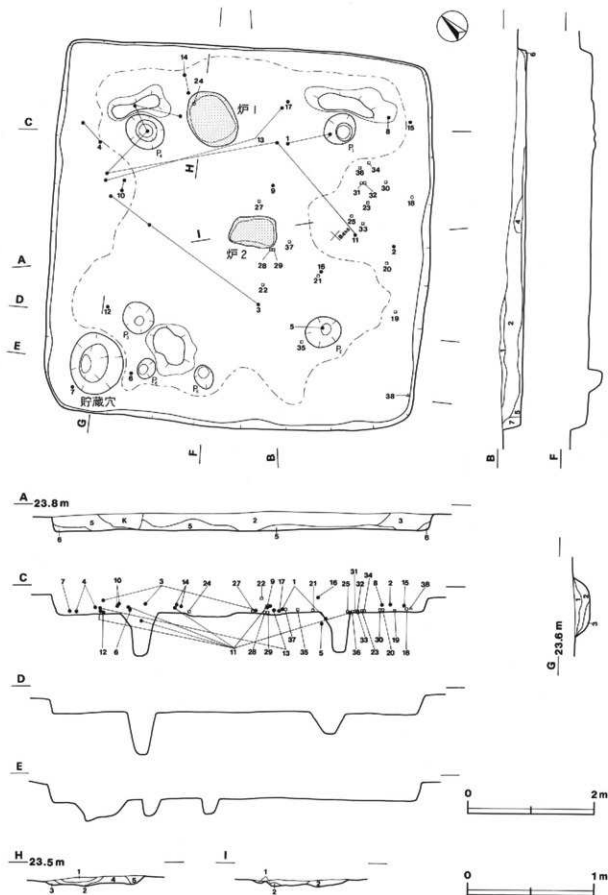
炉2土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------------------------|---|------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子小量，ローム小ブロック小量 | 2 | 暗赤褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子小量 |
|---|-----|-------------------------------------|---|------|------------------------------|

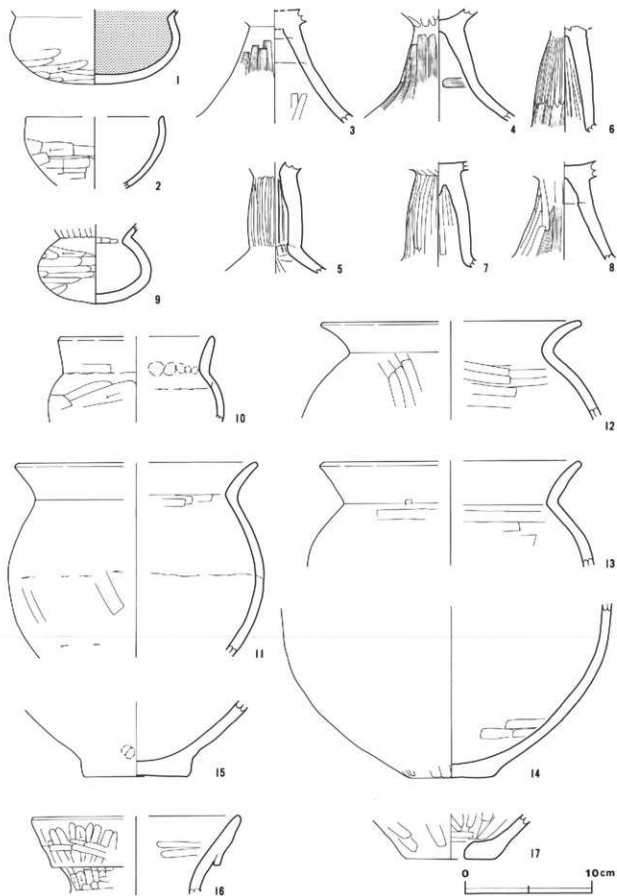
覆土 6層からなり、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

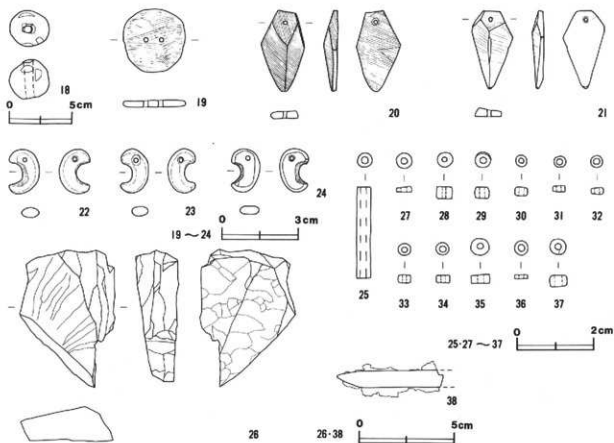
- | | | | | | |
|---|-----|-------------------------|---|-----|--------------------|
| 1 | 黒色 | ローム粒子微量 | | | 粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 | 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック微量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム | 7 | 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック微量 |



第 5 图 第 53 号住居跡实测图



第6图 第53号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第53号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 土師器片872点, 土製品1点, 石製品18点, 鉄製品1点が出土している。第6図1の環は, 中央部の覆土下層とP₁内の覆土上層から出土した破片が接合したものである。2の椀は南東壁付近の覆土中層, 5の高環はP₂内の覆土中層, 12の甕は北西壁寄りの覆土下層, 16の壺は中央部の覆土上層, 17の瓶は北東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。3の高環は中央部の覆土中・下層と北西壁寄りの覆土中層, 4の高環は北西壁付近の覆土中・下層から出土した破片が接合したものである。6・7の高環は西コーナー部の覆土下層から出土している。8の高環と15の甕は東コーナー部付近の覆土中層から出土している。9の埴は中央部の覆土中層から逆位の状態で出土している。10の小形甕は北西壁寄り, 14の甕は北東壁寄りの, とともに覆土中層から出土した破片が接合したものである。11の甕は, 北部を中心とした覆土下層及びP 4内の覆土上層から出土した破片が接合したものである。13の甕は, 北東壁寄りと北西壁寄りの, とともに覆土下層から出土した破片が接合したものである。第7図18の土玉と20の剣形品は, 南東壁付近の覆土下層から出土している。19の双孔円板は南東壁付近, 23の勾玉は南東壁寄りの, とともに床面から出土している。21の剣形品は中央部の床面, 22の勾玉は中央部の覆土上層から出土している。24の勾玉は北東壁寄りの覆土下層から出土している。25の管玉は南東壁寄りの床面から出土している。26の剥片は西部の覆土中から出土している。27~37の白玉は中央部から南東壁寄りを中心として, 床面から覆土下層にかけて出土している。38の不明鉄製品は南コーナー部付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は, 双孔円板, 白玉, 剣形品などの石製模造品や勾玉が出土していることから, 住居内祭祀が行われた可能性が考えられる。本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期(5世紀第2四半期)と考えられる。

第53号住居跡出土土物観察表

図版番号	器種	J[図版(cm)]	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図	環土師器	B(5.9)	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り後、ナデ。内面ナデ。内面赤彩。	石灰・雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P19 40% PL4 覆土下層・P・内 面上層 内面剥離
2	環土師器	A[5.4] B(5.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり。口縁部に歪。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	雲母・砂粒 褐色 普通	P11 30% PL4 覆土中層 内面剥離
3	高環土師器	B(9.0)	脚部の破片。下位はラッパ状に開く。	脚部外面へラ目調整。内面へラナデ。脚部内面に輪積み痕を残す。	長石・雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P12 25% PL4 覆土中・下層
4	高環土師器	B(8.9)	脚部の破片。ラッパ状に開く。	脚部外面へラ目調整。内面下位横ナデ。	雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P13 20% PL4 覆土中・下層
5	高環土師器	B(8.8)	脚部の破片。口縁部は丸底。中位にやや膨らみを持ち、下位で大きく開く。	脚部内・外面へラナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい・黄褐色 普通	P14 20% PL4 P・内面上層
6	高環土師器	B(8.3)	脚部の破片。柱状でやや開く。	脚部外面へラ目調整後、へラ磨き。内面へラナデ。	石灰・雲母・砂粒 にぶい・黄褐色 普通	P15 20% PL4 覆土下層
7	高環土師器	B(8.3)	脚部の破片。柱状でやや開く。	脚部外面へラ磨き。内面へラナデ。	雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P16 20% PL4 覆土下層 内面剥離
8	高環土師器	B(7.9)	脚部の破片。ラッパ状に開く。	脚部外面へラ目調整後、へラナデ。内面ナデ。内面に輪積み痕を残す。	長石・雲母・砂粒・小石・スコリア ぶい・褐色 普通	P17 20% PL4 覆土中層
9	埴土師器	B(6.3)	口縁部の欠損。丸底。体部は扁平な球形状を呈し、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部外面低位のへラナデ。内面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。	長石・雲母・砂粒 ぶい・褐色 普通	P18 85% PL4 覆土中層
10	小形埴土師器	A[12.0] B(6.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面折曲後。体部外面へラ削り後、ナデ。内面に輪積み痕を残す。	雲母・砂粒 ぶい・褐色 普通	P25 5% PL4 覆土中層
11	埴土師器	A[18.8] B(15.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。体部内・外面に輪積み痕を残す。	雲母・砂粒 赤色 普通	P19 30% PL4 覆土下層・P・内 面上層 内面剥離
12	埴土師器	A[20.4] B(7.8)	体部から口縁部の破片。頸部は「く」の字状に開出し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面低位へラナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア 褐色 普通	P20 10% PL4 覆土下層
13	埴土師器	A[20.2] B(8.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面低位のへラナデ。	雲母・砂粒 褐色 普通	P21 10% PL4 覆土下層 内面剥離
14	埴土師器	B(13.6) C 6.3	底部から体部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面低位のへラナデ。	雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P24 20% PL4 覆土中層 内面剥離
15	埴土師器	B(5.9) C 8.3	底部から体部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。体部外面下位に折痕を残す。	雲母・砂粒 ぶい・褐色 普通	P25 5% PL5 覆土中層
16	埴土師器	A[16.2] B(6.2)	口縁部の破片。折り返し口縁でおむかに外反する。	口縁部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P22 5% PL5 覆土上層
17	埴土師器	B(3.6) C[7.0]	底部から体部下位の破片。半孔式。体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面へラナデ。	石灰・長石・雲母・砂粒・スコリア ぶい・褐色 普通	P26 5% PL5 覆土下層

図版番号	器種	計測値				現存率(%)	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第7図18	土玉	3.1	3.1	0.8	24.0	100	DP1 覆土下層 PL9

図版番号	器種	計測値				重量(g)	材質	備考			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)						
第7図19	双孔円板	2.5	2.4	0.3	0.2	3.54	滑石	Q1	床面	PL5	2孔
20	梨形品	3.2	1.7	0.5	0.15	3.76	滑石	Q2	覆土下層	PL5	
21	梨形品	3.1	1.6	0.4	0.15	2.50	滑石	Q3	床面	PL5	
22	勾玉	1.8	1.2	0.4	0.2	1.06	滑石	Q4	覆土上層	PL5	
23	勾玉	1.8	1.1	0.4	0.2	0.90	滑石	Q5	床面	PL5	
24	勾玉	1.7	1.2	0.3	0.2	0.96	滑石	Q6	覆土下層	PL5	
25	管玉	2.4	0.4	—	0.2	0.50	滑石	Q7	床面	PL5	
26	梨片	7.2	5.1	1.8	—	83.0	滑石	Q36	西部覆土中		

図版番号	器種	計測値				重量(g)	材質	備考			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)						
27	白玉	0.4	0.1	0.2	0.05		滑石	Q8	床面	PL5	
28	白玉	0.4	0.3	0.1	0.09		滑石	Q9	床面	PL5	
29	白玉	0.4	0.3	0.15	0.09		滑石	Q10	床面	PL5	
30	白玉	0.3	0.25	0.1	0.03		滑石	Q11	床面	PL5	
31	白玉	0.3	0.12	0.1	0.02		滑石	Q12	床面	PL5	
32	白玉	0.3	0.2	0.1	0.03		滑石	Q13	床面	PL5	
33	白玉	0.3	0.2	0.1	0.03		滑石	Q14	床面	PL5	
34	白玉	0.3	0.2	0.15	0.04		滑石	Q15	床面	PL5	
35	白玉	0.5	0.2	0.15	0.10		滑石	Q16	覆土下層	PL5	
36	白玉	0.35	0.1	0.15	0.02		滑石	Q17	床面	PL5	
37	白玉	0.4	0.3	0.2	0.08		滑石	Q18	覆土下層	PL5	

図版番号	器種	計測値				重量(g)	材質	備考			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)						
38	不明梨形品	(5.6)	0.9	0.5	(0.45)		鉄	M1	覆土下層		

第54号住居跡(第8・9・10図)

位置 調査AIV区北部, B4a1区。

規模と平面形 長軸5.87m, 短軸5.65mの方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は16~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、貯蔵穴付近から炉の周辺が踏み固められている。また、貯蔵穴北側の床面から長軸57cm, 短軸25cmの長方形に広がる粘土を検出した。

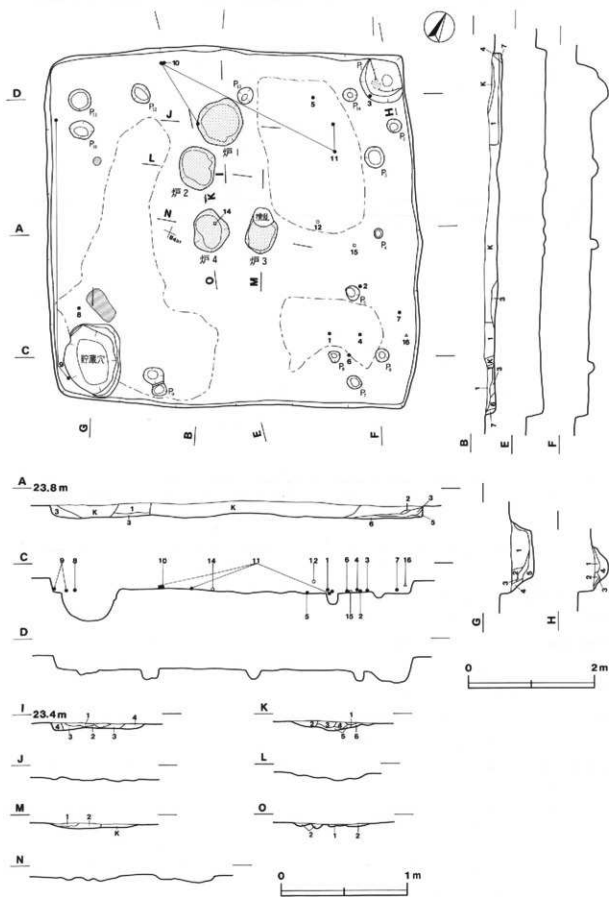
貯蔵穴 南コーナー部に位置し、長径115cm, 短径90cmの楕円形、深さは48cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

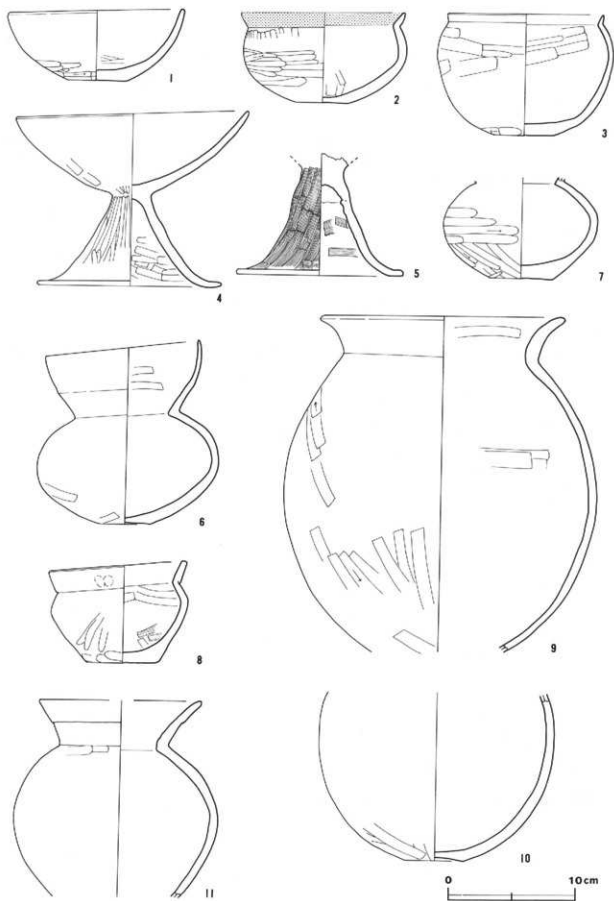
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

ピット 14か所(P₁~P₁₄)。P₁は長径70cm, 短径65cmのほぼ円形、深さは27cmで、北コーナー部に位置する。

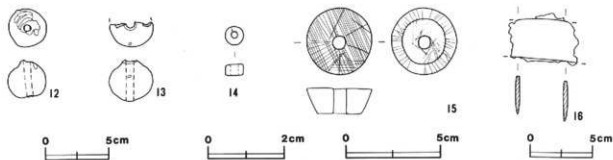
P₉は長軸46cm, 短軸20cmの楕円形、深さは12cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P₂~P₈・P₁₀~P₁₄は北西壁付近から北東壁付近に位置し、長径15~40cm, 短径14~35cmの円形及び楕円



第 8 图 第54号住居跡实测图



第9图 第54号住居跡出土遺物実測図(1)



第10図 第54号住居跡出土遺物実測図(2)

形、深さは6～19cmである。これらのピットについては性格不明である。

P土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

炉 4か所。炉1は北西壁寄りに位置し、長径75cm、短径70cmのほぼ円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は、赤変硬化している。炉2は中央部よりやや北西寄りに位置し、長径70cm、短径57cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめている。炉床は、赤変硬化している。炉3は中央部に位置し、長径55cm、短径46cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は、赤変硬化している。炉4は中央部に位置し、長径66cm、短径52cmの不整楕円形で、床面を2cmほど掘りくぼめている。炉床は、赤変硬化している。これら4か所の炉のうち、炉1は他の3か所の炉と比べ焼土が一番多く残っている。なお、炉の時期差及び複数の炉の同時使用等については不明である。

炉1土層解説

- 1 暗赤灰色 焼土粒子中量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック中量、焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量

炉2土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量

炉3土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子微量

炉4土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量

覆土 7層からなり、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片421点、土製品2点、石製品2点、鉄製品1点が出土している。第9図1の坏は、東コーナー一部

付近の覆上下層から出土している。2の輪は北東壁寄りの床面から逆位の状態で、3の輪は北コーナー部付近の床面から出土している。4の高坏は東コーナー部付近の覆上下層から、6の埴は東コーナー部付近の床面から、ともに横位の状態で出土している。5の高坏は北西壁寄りの、10の甕は北西壁付近の、ともに床面から出土している。7の埴は、北東壁付近の覆土中層から出土している。8の小形甕は、南西壁付近の覆土下層から横位の状態で出土している。9の甕は、南コーナー部付近と西コーナー部付近の、ともに覆上下層から出土した破片が接合したものである。11の埴は、北部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。第10図12の土玉は中央部の覆土上層、13の土玉は北部の覆土中層、14の白玉は中央部の覆土下層から出土している。15の紡錘車は、北東壁寄りの床面から出土している。16の鉄鎌は、東コーナー部付近の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期（5世紀第2四半期）と考えられる。

第54号住居跡出土土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図1	環土師器	A 13.8	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラ磨き。	長石・雲母・砂粒・棕色 普通	P27 60% PL5 覆土下層 内面割離
		B 5.7				
		C 4.6				
2	輪土師器	A 12.9	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。口縁部内・外面赤彩。	雲母・砂粒・スコリア (内)本色(外)にふい褐色 普通	P28 55% PL5 床面 内面割離
		B 7.2				
		C 4.1				
3	輪土師器	A 12.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。	長石・砂粒・スコリア 褐色 普通	P29 30% PL5 床面 内面割離
		B 9.6				
		C [4.6]				
4	高坏土師器	A 18.2	脚部及び坏部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。脚部外面へラ磨き、内面へラナデ。脚部端部内・外面横ナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア 褐色 普通	P30 90% PL5 覆土下層 内・外面割離
		B 14.0				
		D 14.4				
5	高坏土師器	B (9.6)	脚部の破片。ラッパ状に開く。	脚部外面へラ割離。内面に輪組み紋を施す。	雲母・砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P31 45% PL5 床面 内面割離
		D 13.2				
6	埴土師器	A 12.1	口縁部一部欠損。平底。体部は扁平な球形状を呈する。口縁部は中位に絞を帯び、わずかに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・長石・砂粒・スコリア 褐色 普通	P32 85% PL5 床面
		B 14.6				
		C 4.4				
7	埴土師器	B (8.0)	底部から体部の破片。平底。体部は扁平な球形状を呈する。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア 褐色 普通	P33 70% PL5 覆土中層 内面割離
		C 5.0				
8	小形埴土師器	A 10.4	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を帯び、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面に指痕を施す。体部内・外面へラナデ。	雲母・砂粒・スコリア にふい褐色 普通	P36 70% PL5 覆土下層
		B 8.1				
		C 5.7				
9	甕土師器	A 18.8	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径を帯び、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部は外面斜位のへラ削り後、ナデ。内面へラナデ。	雲母・砂粒・スコリア にふい褐色 普通	P34 50% PL6 覆土下層 内面割離
		B (26.4)				
10	甕土師器	B (13.3)	底部から体部の破片。上口径気味の平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・長石・雲母・砂粒・小石 にふい赤褐色 普通	P35 49% PL5 床面
		C 4.6				
11	空土師器	A [12.7]	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径を帯び、口縁部は複合口縁で外反する。	体部外面上位腹方向のへラナデ。内面ナデ。	雲母・砂粒・小石 明褐色 普通	P37 50% PL6 覆土下層 内・外面割離
		B (15.5)				

図版番号	器種	計測値				現存率(%)	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第10図12	土玉	3.0	3.0	0.6	23.0	100	D P 2 覆土上層 P L 9
13	土玉	3.3	(3.0)	0.7	(16.0)	50	D P 3 北部覆土中 P L 9

図版番号	器種	計測値				材質	備考	
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第10図14	冪玉	0.5	0.25	0.2	0.08	滑石	Q19	覆+下型 P1.5
図版番号	器種	計測値				材質	備考	
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
15	鈴鐺車	3.4	1.3	0.7	24.0	滑石	Q20	床面 P1.6
図版番号	器種	計測値				材質	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
16	鉄鏝	(3.5)	4.2	0.4	(25.0)	鉄	M2	覆土中層 P1.6



第11図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡 (第11・12図)

位置 調査AIV区中央部, B3db区。

規模と平面形 長軸6.97m, 短軸6.83mの隅丸方形である。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高は3~8cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、貯蔵穴周辺が締め固められている。貯蔵穴北側の床面から長さ18cm, 短径11cmの楕円形に広がる粘土を検出した。中央部は攪乱を受けている。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長径125cm, 短径100cmの楕円形で、深さは46cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック・炭化粒子微量

ピット 10か所(P₁~P₁₀)。P₁~P₄は、長径25~40cm, 短径23~30cmの円形及び楕円形, 深さは19~44cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は、径33cmの円形で、深さは11cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆~P₉は、長径20~57cm, 短径20~48cmの円形及び楕円形, 深さは12~17cmで、補助柱穴と考えられる。P₁₀は長径73cm, 短径65cmの楕円形, 深さは24cmで、北コーナー部に位置する。性格は不明である。

P₁₀土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量

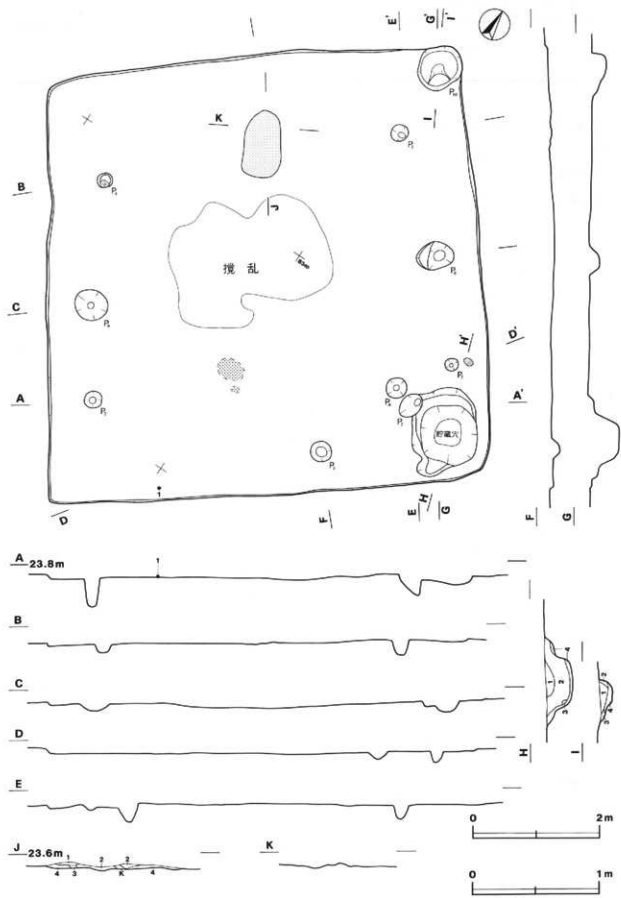
炉 北西壁寄りに位置し、長径105cm, 短径58cmの楕円形で、床面を3cmほど掘り込んだ地床である。加床は、赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片147点が出土している。第11図1の柄は、南東壁付近の床面から正位の状態で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期(5世紀第2四半期)と考えられる。



第12图 第55号住居跡実測图

第55号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色灰・組成	備考
第11区 1	陶 土師器	A 8.2 B 4.4 C 2.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内母しなから立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下へツ振り後、ナデ。内面へツナデ。	粘土・色灰・砂粒に多い褐色普通	P38 99% P1.6 床面

第56号住居跡 (第13・14・15区)

位置 調査AIV区中央部, B3e区。

規模と平面形 長軸7.28m, 短軸7.04の隅丸方形である。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は36~44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅11~21cm, 下幅5~17cm, 深さ4~13cmで、断面形はU字状である。

床 全体的に平坦で、主柱穴より外側の部分が踏み固められている。壁溝から中央部に向かって延びる溝4条を検出した。北東壁下から1条(a), 南西壁下から3条(b・c・d)の溝がそれぞれ中央部に向かってい。長さ79~105cm, 上幅15~25cm, 下幅6~15cm, 深さ11~17cmで、断面形はU字状である。溝dは、P₁₀につながっている。北東壁東コーナー寄りに焼土塊が、北東壁及び南東壁寄りからわずかに炭化物が、貯蔵穴1の南側からわずかに粘土がそれぞれ検出されている。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は、南コーナー部に位置し、長径123cm, 短径115cmの円形、深さは49cmである。底面は平出である。貯蔵穴2は、東コーナー部に位置し、長径102cm, 短径56cmの楕円形、深さは39cmである。底面は凹状である。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭土粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック微量

ピット 12か所(P₁~P₁₂)。P₁~P₄は、長径55~71cm, 短径41~58cmの楕円形及び不整形形、深さは76~83cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は、長径56cm, 短径40cmの楕円形、深さは15cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆~P₁₂は、長径17~51cm, 短径14~35cmの円形及び楕円形、深さは15~45cmで、補助柱穴と考えられる。

P₁土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子多量

P₅土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量

P₆土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量

④土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

炉 北西壁寄りに位置し、長径118cm、短径78cmの楕円形で、床面を11cmほど皿状に掘り込んだ床炉である。

炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少許、焼土小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

覆土 7層からなり、自然堆積である。

土層解説

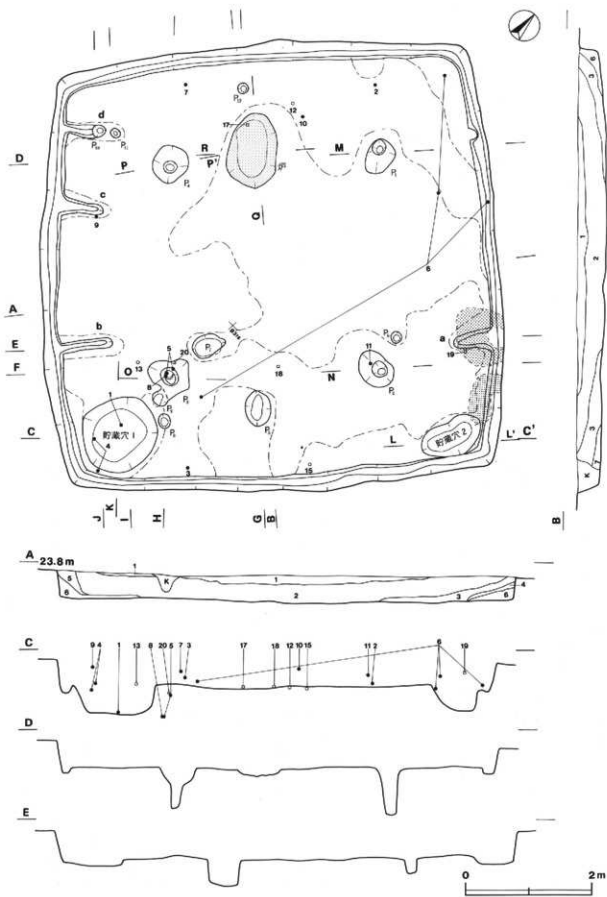
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片1154点、土製品5点、石製品3点、鉄製品1点が出土している。第15図1の坏は、貯蔵穴1内の覆土下層から正位の状態で出土している。2の坏は北西壁付近の、3の坏は南東壁付近の、ともに覆土下層から出土している。4の高坏は、南コーナー部の覆土下層と貯蔵穴1内の覆土上層から出土した破片が接合したものである。5の高坏は、P₃内の覆土上・下層から出土した破片が接合したものである。6の高坏は、北東壁付近と南東壁寄りの覆土下層から出土した破片が接合したものである。7の高坏は北西壁付近の覆土中層、8の高坏はP₃内の覆土下層、9の高坏は南西壁付近の覆土上層、10の甕は中央部の覆土中層、11の甕は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。12の土玉は北西壁寄り、13の土玉は南コーナー部寄り、15の土玉は南東壁付近のともに床面から出土している。14の土玉は南部の、16の土玉は東部の、ともに覆土中から出土している。17の白玉は北西壁寄りの覆土下層、18の白玉は中央部の床面からそれぞれ出土している。19の滑石塊は、北東壁付近の覆土中層から出土している。石製模造品の素材と思われる。20の鉄鏝は、P₃内の覆土上層から出土している。

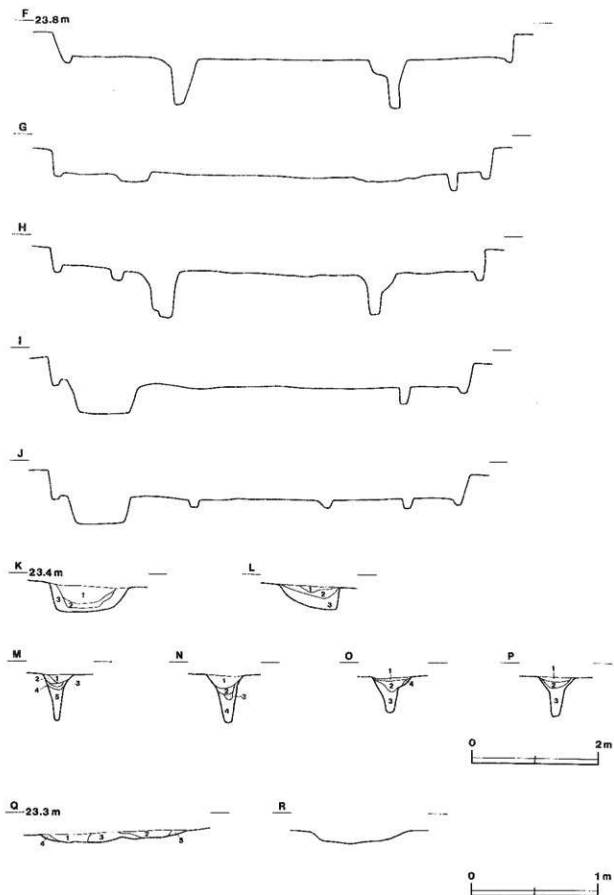
所見 本跡は、床面から焼土及び炭化物がみられたことから、焼失家宅の可能性が考えられる。本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期（5世紀第2・4半期）と考えられる。

第56号住居跡出土遺物観察表

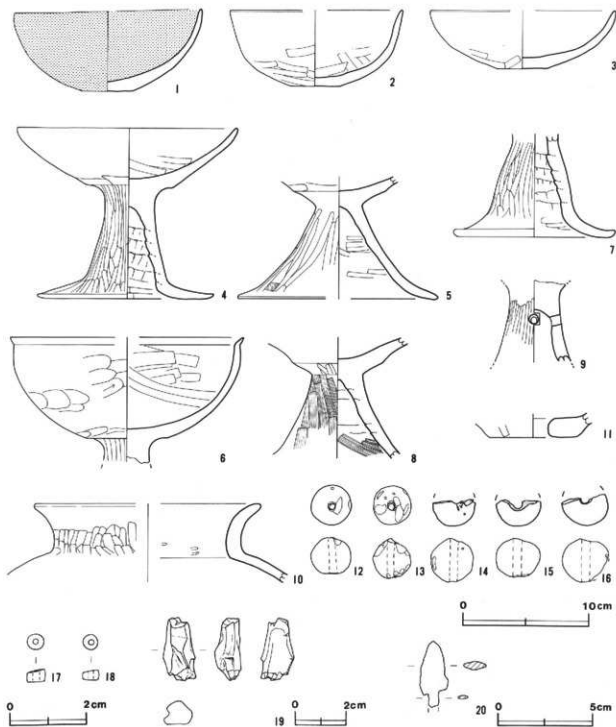
図版番号	器種	器径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第15図 1	坏 土師器	A 14.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。底部へラ削り後、ナデ。内・外面赤彩。	石灰・長石・雲母・砂粒 明赤褐色	P30 70% P L6 貯蔵穴1内覆土下層 内面刺彫
		B 6.5				
		C 4.0				
2	坏 土師器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は外脣する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。底部へラ削り後、ナデ。	石灰・砂粒・スコリア ふいば褐色	P40 35% P L6 覆土下層 内面刺彫
		B 6.0				
		C 3.8				
3	坏 土師器	A [14.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。底部及び体部外面へラ削り後、ナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア 明赤褐色	P41 30% P L6 覆土下層 内面刺彫
		B 4.6				
		C 4.0				



第13图 第56号住居跡实测图(1)



第14图 第56号住居跡実測图(2)



第15図 第56号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第15図 4	高土師器 環	A 17.3 B 13.5 D [14.0]	脚部一部欠損。脚部は柱状でやや開き、腹部は屈曲して大きく開く。環部の下位に絞を持ち、内脣して立ち上がり、口縁部に至る。脚部中位に未貫通孔がある。	口縁部内・外面横ナデ。環部外面へラ削り後、ナデ。脚部外面へラ磨き。内面へラナデ。脚部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石・雲母・砂粒 にふい・橙色 普通	P42 85% PL6 環土下層・貯蔵 穴1内環土上層 内面剥離
5	高土師器 環	B [9.7] D [7.6]	脚部から環部下位の破片。脚部はラッパ状に開く。環部の下位に弱い絞を持つ。	環部下位横位のへラ削り後、ナデ。脚部外面ハケ目調整後、へラ磨き。内面へラナデ。	雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P43 55% PL6 P ₁ 内環土上・ 下層
6	高土師器 環	A [18.6] B 10.0	環部の破片。環部は内脣して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。環部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。	砂粒 にふい・橙色 普通	P44 20% PL6 環土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地成	備考
第15図 7	高 上 脚 器	B(8.3) D 12.2	脚部の破片,脚部は中位にやや膨らみを持ち,下位で大きく開く,端部は反る。	脚部内・外面ヘラナデ。端部内・外面ナデ。脚部内面に輪組み痕を残す。	石英・長石・雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	P45 30% PL7 覆土中層
	高 上 脚 器	B(9.6)	脚部から坯部の破片,脚部はラッパ状に開く。坯部は下位に絞を待つ。	坯部ヘラ削り後,ナデ。脚部内・外面ハケ目調整,脚部内面に輪組み痕を残す。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P46 30% PL7 P ₁ 内覆土下層 内面割線 二次焼成
9	高 上 脚 器	B(6.4)	脚部中位から上位の破片,脚部中位に一つの円孔が穿たれている。	脚部外面縦位のヘラ削ぎ,内面ナデ。	石英・長石・砂粒・スコリア 褐色 普通	P47 10% PL7 覆土上層
10	壺 上 脚 器	A[17.6] B(6.2)	体部から口縁部の破片,体部は内凹し,口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。	長石・雲母・砂粒・スコリア 褐色 普通	P48 5% PL7 覆土中層
	瓶 上 脚 器	B(1.9) C[7.0]	底部の破片,傘孔式。	底部外面ヘラナデ。内面ナデ。	雲母・砂粒 スコリア 黒褐色 普通	P49 6% PL7 覆土中層

図版番号	器種	計 測 値				現存率 (%)	備 考	
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
12	土 玉	2.9	3.2	0.7	25.0	100	DP4 床面	PL9
13	土 玉	3.2	3.1	0.6	25.0	100	DP5 床面	PL9
14	土 土	3.5	(3.4)	(0.7)	(17.0)	50	DP6 南部覆土中	PL9
15	土 玉	3.1	(3.6)	(0.7)	(17.0)	50	DP7 床面	PL9
16	土 土	3.5	(3.2)	(0.6)	(22.0)	45	DP8 東部覆土中	PL9

図版番号	器種	計 測 値				石質	備 考	
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
17	白 玉	0.4	0.3	0.15	0.08	滑石	Q21 覆土下層	PL7
18	白 玉	0.4	0.25	0.15	0.06	滑石	Q22 床面	PL7

図版番号	器種	計 測 値				石質	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
19	滑石瓦	2.5	1.3	1.1	3.80	滑石	Q23 覆土中層	PL7

図版番号	器種	計 測 値				材質	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
20	鉄 瓦	(3.5)	1.5	0.5	(1.86)	鉄	M3 P ₁ 覆土上層	PL7

表2 実教寺子遺跡住居跡一覧表

BS番号	方位	土軸方向	平面形	規模[m] 長軸×短軸	壁高(m)	床面	内 部 施 設					材	覆土	出土遺物	備考	
							塼	溝	土壇	竈	ピット					入口
53	B4g	N-30°-E	方 形	6.02×5.38	22-23	平沢	-	-	4	1	1	1	2	人	土師器(灰・陶・高坏・壺・甕・甗・甗), 土玉, 石製品(瓦孔・瓦筒・甗形品・勾玉・碧玉・白玉), 不明鉄製品	5世紀第2四半期
54	B4a	N-21°-W	方 形	5.87×5.63	16-20	平沢	-	-	1	14	-	-	4	人	土師器(灰・陶・高坏・壺・甗・甗), 土玉, 石製品(白瓦・磨盤), 鉄製	5世紀第2四半期
55	B3d	N-36°-W	隅丸方形	6.97×6.83	3-8	平沢	-	-	4	1	5	1	1	小	土師器(陶)	5世紀第2四半期
56	B3e	N-48°-W	隅丸方形	7.28×7.04	36-44	平沢	全周	4	4	2	7	1	1	自然	土師器(灰・高坏・壺・甗), 土玉, 石製品(口瓦・石材), 鉄製	5世紀第2四半期 焼失遺跡

2 方形竪穴状遺構

第52号住居跡は、竪穴住居跡として調査したが、他の住居跡と比べて小規模で、かや貯蔵穴、柱穴等もみられず、居住施設とは考えにくい。整理の段階で方形竪穴状遺構とした。以下、遺構と遺物について記載する。

第1号方形竪穴状遺構〔S I - 52〕(第16・17図)

位置 調査AIV区東部、B4a区。

規模と平面形 長軸3.38m、短軸3.26mの隅丸方形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は58~60cmで、外傾して立ち上がる。

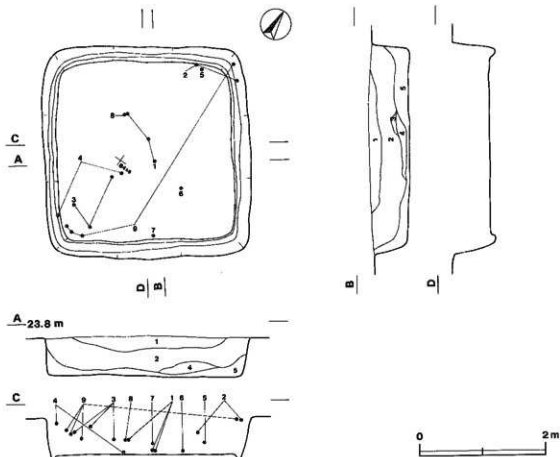
壁溝 全周する。上幅10~18cm、下幅5~8cm、深さ6~10cmで、断面形はU字状である。

床 全体的に平坦で、特に踏み固められた部分はみられない。

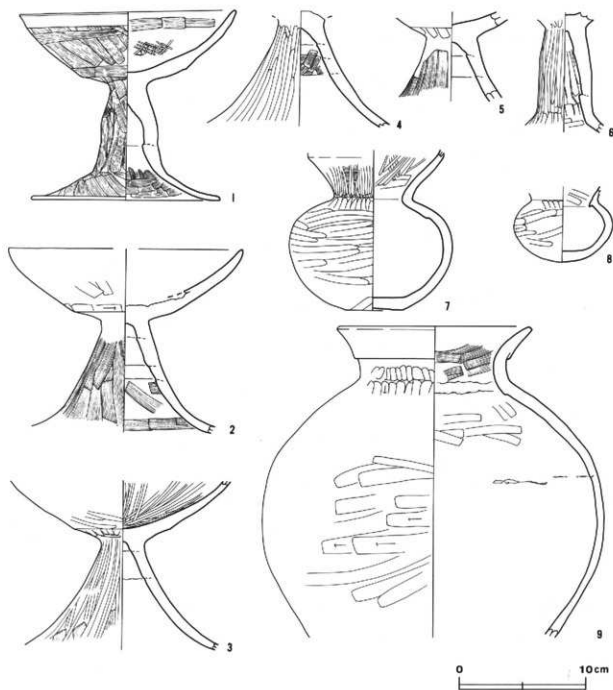
覆土 5層からなり、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微粉
- 2 黒褐色 ローム粒子中粒、ローム中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多粒、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量



第16図 第1号方形竪穴状遺構実測図



第17図 第1号方形竪穴状遺構出土遺物実測図

遺物 土師器片78点が出土している。第17図1の高坏は、中央部の覆土中層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。2の高坏は、北コーナー部付近の覆土上層と覆土中層から出土した破片が接合したものである。3の高坏は、中央部の覆土中層と南コーナー部付近の覆土中・下層から出土した破片が接合したものである。4の高坏は、南コーナー部の覆土上層と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5の高坏は、北コーナー部付近の覆土中層から出土している。6の高坏は中央部の覆土下層から出土している。7の埴は南東壁付近の、8の埴は中央部の、ともに覆土中層から横位の状態でも出土している。9の壺は、南コーナー部の覆土中層と北コーナー部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期（5世紀第2四半期）と考えられる。

第1号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17回	高 土 師器	A 17.0 B 15.1 D 14.8	口縁部一部欠損。脚部は中位にやや膨らみを持ち、下位で大きく開く。環部は下位に強い稜を持ち、内側で立ち上がる。	環部外面ハケ目調整。内面ヘラ磨き。脚部外面及び内面下位ハケ目調整。外面縦位線磨。脚部内面に輪積み痕を残す。	長石・雲母・砂粒・スコリア に多い黄褐色 普通	P1 30% PL7 覆土中・下層
2	高 土 師器	A[18.4] B[14.5]	脚部及び口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。環部は下位に稜を持ち、内側で立ち上がる。	口縁部内・外面積ナテ。環部外面下位稜位のヘラ磨り後、ナテ。脚部外面縦位のハケ目調整。内面縦位のハケ目調整。脚部内面に輪積み痕を残す。	雲母・砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P2 70% PL7 覆土中・下層 内面割離
3	高 土 師器	B[13.4]	脚部から環部の破片。脚部はラッパ状に開く。環部は下位に弱い稜を持ち、内側で立ち上がる。	環部内・外面ヘラ磨き。環部外面底部ヘラナテ。脚部外面ハケ目調整後、ヘラ磨き。内面ナテ。環部内・外面積ナテ。脚部内面に輪積み痕を残す。	雲母・砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P3 40% PL7 覆土中・下層
4	高 土 師器	B(9.1)	脚部の破片。下位はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラナテ。内面ハケ目調整。脚部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石・雲母・砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P4 30% 覆土上・下層
5	高 土 師器	B(7.1)	脚部から環部の破片。脚部はラッパ状に開く。環部は下位に弱い稜を持つ。	環部外面底部ヘラナテ。脚部外面ハケ目調整。脚部内面に輪積み痕を残す。	長石・雲母・砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P5 30% PL7 覆土中層 内面割離
6	高 土 師器	B(9.5)	脚部の破片。脚部はほぼ柱状を呈し、中位にやや膨らみを持つ。	脚部外面ヘラ磨き。内面ヘラナテ。脚部内面に輪積み痕を残す。	砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P6 20% PL7 覆土上層
7	埋 土 師器	B[12.7] C 4.4	口縁部欠損。上げ気味の平底。体部は扁平半球形状を呈する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部外面ハケ目調整後、ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。体部外面上位縦位のヘラ磨り後、ナテ。中・下位縦位のヘラ磨き。	石英・砂粒 に多い褐色 普通	P7 80% PL7 覆土中層
8	埋 土 師器	B(6.1)	底部から口縁部下位の破片。丸底。体部は扁平半球形状を呈する。頸部内面下層は、下方にわずかに突出する。	口縁部内面ヘラナテ。体部外面縦位のヘラ磨き。内面底部ヘラナテ。	石英・砂粒・スコリア に多い褐色 普通	P8 50% PL7 覆土中層 外面割離
9	壺 上 師器	A 15.2 B(24.8)	体部から口縁部の破片。体部は、内側で立ち上がり、中位に最大径を呈す。口縁部は複合口縁で、外反する。	口縁部内面ハケ目調整後、内・外面積ナテ。体部外面ヘラ磨り後、ナテ。内面ヘラナテ。体部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石・砂粒・スコリア に多い黄褐色 普通	P9 40% PL7 覆土上・中層

3 方形周溝墓

今回の調査で方形周溝墓2基が検出された。以下、遺構の形態などについて記載する。

第1号方形周溝墓（第18・19図）

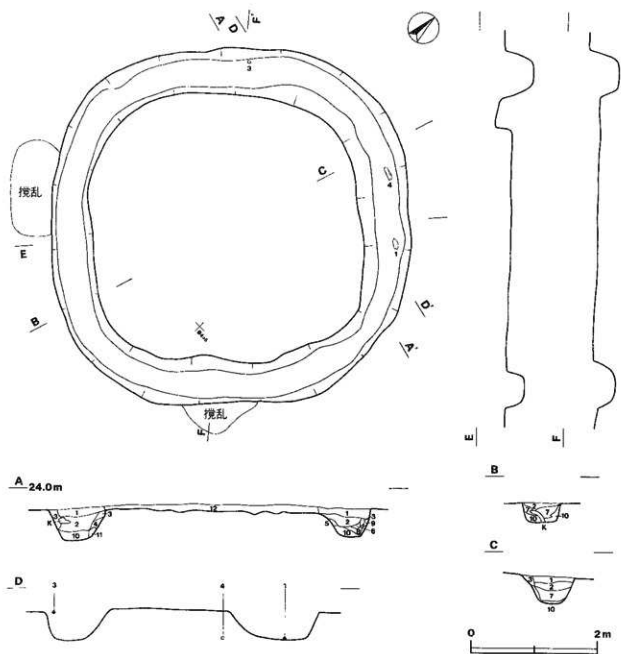
位置 調査AIV区北東部、A4j区。

規模と形状 平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北5.65m、東西5.58m、方台部で南北4.23m、東西4.22mである。盛り土は認められなかった。

方位 N-40°-E

周溝 溝の上幅は0.53-0.82m、下幅は0.24-0.38mで、深さは21-28cmである。底面は平坦で、断面形はU字状である。北東部分は、古墳時代中期の地表面と思われる、厚さ約20cmの褐色土層上面で確認できたことから、肩溝は50cm前後の深さだったと考えられる。

覆土 12層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



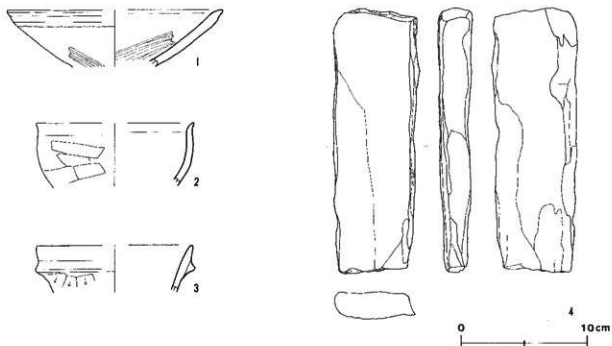
第18図 第1号方形周溝墓実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|---------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 7 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子微積 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微積 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | ローム粒子微量、6層より色調が明るい。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量 | 10 極暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子中量、4層より色調が暗い。 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子少量 |

遺物 土師器片28点及び石器1点が出土している。第19図1の高坏及び4の礎が周溝の北東部の底面から出土し、2の坏が周溝の覆土中から、3の壺が周溝の北西部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



第19図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	高坏土師器	A [17.0] B (4.5)	坏部の破片。坏部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面へラ磨き。	砂粒・長石・スコリア に濃い棕色 普通	P59 10% P L8 群馬北東部灰面
2	坏土師器	A 12.4 B (5.0)	体部から口縁部の破片。体部は内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。	砂粒・長石 暗褐色 普通	P50 20% P L8 覆土中
3	带土師器	B (4.7)	口縁部の破片。口縁部外面に被をもち、外傾する。	口縁部上位内・外面横ナデ。外面下位へラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア・小石 明赤褐色 普通	P61 5% P L8 群馬北東部覆土 上層

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	硯	(21.0)	(6.8)	(2.7)	(573.0)	重石(オランダ) 7.5.1.5	Q25 群馬北東部灰面 P L 8

第2号方形周溝墓 (第20・21図)

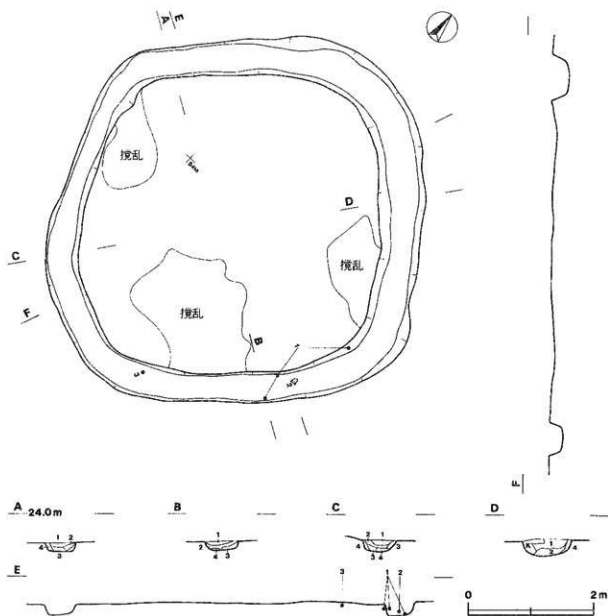
位置 調査区AIV北東部, B4ba区。

規模と形状 平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北6.10m, 東西5.77m, 方台部で南北4.78m, 東西4.73mである。盛り土は認められなかった。

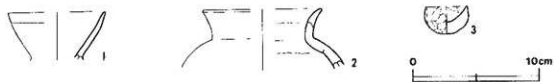
方位 N-38°-E

周溝 溝の上幅は0.37~0.75m, 下幅は0.28~0.45mで、深さは15~29cmである。底面は平坦で、断面形はU字状である。

覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第20図 第2号方形周溝墓実測図



第21図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック散在
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・粒子散在
- 4 暗褐色 ローム粒子散在

遺物 土師器片20点が出土している。第21図1の埴, 2の壺, 3の手掘り土器がいずれも周溝の南東部の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(m)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・地成	備 考
第21図 1	埴 土師器	A 7.6 B (3.8)	口縁部の破片。口縁部はわずかに 内彎する。	口縁部上位内・外面横ナデ。外面下 位縦位のナデ。	砂粒・スコリア にふい・橙色 普通	P62 26% P.L8 周溝南東部覆土 中層
2	壺 土師器	A [9.2] B (4.8)	体部から口縁部の破片。体部は内 彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナ デ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア にふい・黄褐色 普通	P63 19% P.L8 周溝南東部覆土 中層
3	手置土器 土師器	A [3.1] B 2.2	体部から口縁部の破片。体部は厚 みをもつ。	体部内・外面指ナデ。口縁部は指 でつまみ上げている。	砂粒・長石・スコ リア 暗褐色 普通	P64 40% P.L8 周溝南東部覆土 中層

4 土坑

今回の調査で土坑12基が確認された。出土土器が小片であったり数が少ない遺構の時期については、他の時期の土器片が出土しないことや、同じ台地上に他の時期の遺構が確認されていないことなどから、住居跡と同じ古墳時代中期とした。

第103号土坑 (第22図)

位置 調査AIV区東部、B4g区。

規模と平面形 長径1.34m、短径1.14mの楕円形で、深さは33cmである。

長径方向 N-59°-W

壁 南北は外傾し、東西はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

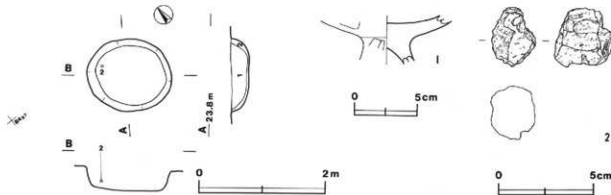
覆土 2層に分層され、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小・中ブロック・粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量

遺物 土師器片8点が出土している。第22図1の高環の脚部片が覆土中から、2の不明石器が覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



第22図 第103号土坑・出土遺物実測図

第103号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第23図 1	高 土 師 器	B(4.9)	脚部から環部の破片。脚部はハの字状に開き、環部は外傾する。	脚部外面へう閉り、内面へうナデ。	砂粒・長石・小石・スコリアにふい黄褐色普通	P30 10% P1.8 覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	不明石器	3.2	3.1	2.8	(4.62)	軽石	Q37 覆土中層

第104号土坑 (第23図)

位置 調査AIV区南部, B3h区。

規模と平面形 長径2.07m, 短径1.63mの楕円形で、深さは10cmである。

長径方向 N-41°-E

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 やや凹凸が見られる。

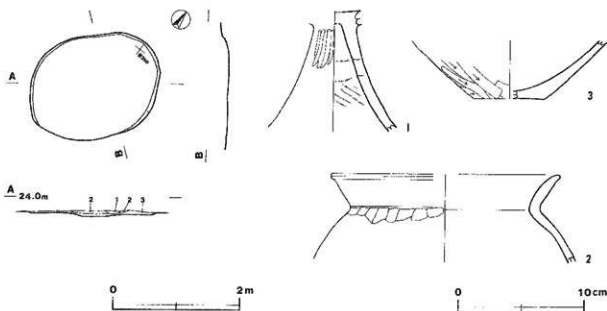
覆土 3層に分層され、単積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片260点が出土している。第23図1の高環, 2, 3の壺が覆土中から出土している。土師器の破片が多数出土しているが、接合できるものが少ないことから、破片が投棄されたと思われる。器種別では高坏片18点、椀片2点、甕片2点が確認できる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期(5世紀第2四半期)と考えられる。



第23図 第104号土坑・出土遺物実測図

第104号土坑出土遺物観察表

図数番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	高 土 師 器	B(9.6)	脚部の破片。脚部はへの字状に開く。	脚部外面へラ磨き。内面へラナデ。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P51 20% P.L8 覆土中
2	甕 土 師 器	A[8.0] B(7.0)	体部から口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P32 5% P.L8 覆土中
3	甕 土 師 器	B(4.7) C[5.6]	底部から体部の破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ削り。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P53 10% P.L8 覆土中

第105号土坑 (第24図)

位置 調査AIV区南部, B3hs区。

規模と平面形 長軸2.03m, 短軸1.62mの隅丸長方形で、深さは10cmである。

長軸方向 N-24'-E

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 やや凹凸が見られる。

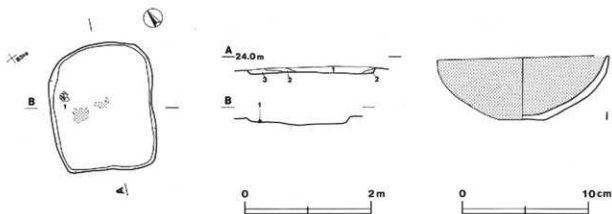
覆土 3層に分層され、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 土師器片130点が出土している。第24図1の坏が、覆土下層から正位で出土している。土師器の破片が多数出土しているが、接合できるものが少ないことから、破片が投棄されたと思われる。器種別では坏1点、高坏15点、碗2点、甕5点が確認できる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期(5世紀第2四半期)と考えられる。



第24図 第105号土坑・出土遺物実測図

第105号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	環 土師器	A 13.6 B 5.2 C 3.6	平底。体部は内壁する。	体部内・外面へラナデ。内・外面赤 彩。	砂粒・長石・スコ リア にふい・橙色 普通	P54 90% PL8 覆土下層

第106号土坑 (第25図)

位置 調査AIV区南部, B3ha区。

規模と平面形 長軸2.33m, 短軸2.17mの方形で、深さは11cmである。

長軸方向 N-61°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

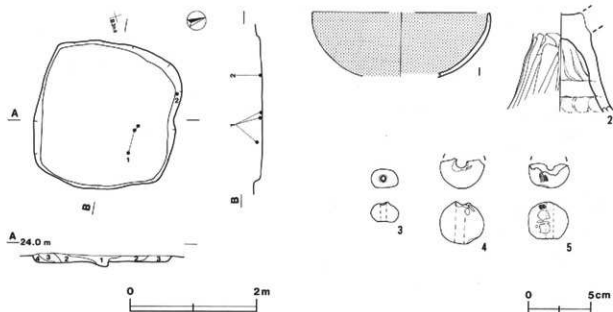
覆土 4層に分層され、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 概暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片217点, 土玉3点が出土している。第25図2の高環の脚部が覆土下層から、1の環と4の土玉が覆土中層から、3の土玉が覆土中から、5の土玉が覆土上層からそれぞれ出土している。土師器片は接合できない別個体の破片が多数含まれている。破碎されて投棄されたと思われる。器種別では高環24点, 埴2点, 碗5点, 甕9点が確認できる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期(5世紀第2四半期)と考えられる。



第25図 第106号土坑・出土遺物実測図

第106号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	下法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏土師器	A[14.0] B[3.1]	体部は内増する。	口縁部内・外面傾ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・スコリア 棕色 普通	P55 10% PL8 覆土中層
2	高坏土師器	B[7.7]	脚部の破片。脚部はへの字状に固く。	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母に多い褐色 普通	P67 20% PL8 覆土下層

図版番号	器種	計測値				現存率(%)	備考			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
3	土玉	(1.6)	2.2	0.5	(4.3)	95	D P 9	そろばん土状	覆土中	PL 9
4	土玉	3.4	(3.4)	(0.7)	(19.0)	55	D P 10	欠損	覆土中層	PL 9
5	土玉	2.9	(3.2)	(0.6)	(16.0)	50	D P 11	欠損	覆土上層	PL 9

第108号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区南部, B31a区。

規模と平面形 長径1.47m, 短径0.58mの楕円形で、深さは26cmである。

長径方向 N-19°-W

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層に分層され、ロームブロックと粘土ブロックを含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土大・中・小ブロック・粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

所見 本跡の時期は、遺物が出土していないことから不明である。

第109号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区南部, B31a区。

規模と平面形 長径0.70m, 短径0.63mの楕円形で、深さは26cmである。

長径方向 N-69°-E

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 6層に分層され、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量、2層より色調が明るい。
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片10点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第110号土坑 (第26図)

位置 調査AIV区南部, B3b区。

規模と平面形 長径1.31m, 短径0.77mの楕円形で, 深さは32cmである。

長径方向 N-19°-E

壁 北東壁はほぼ垂直に, 南西壁は緩やかに立ち上がる。

底面 南西から北東に傾斜している。

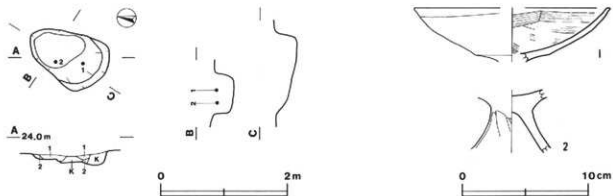
覆土 2層に分層され, 堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物 土師器片4点が出土している。第26図1・2の高杯が覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



第26図 第110号土坑・出土遺物実測図

第110号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	高杯 土師器	A [15.4] B (4.3)	杯部はわずかに内彎し, 下端に弱い稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ後, 杯部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P56 10% PL8 覆土上層
2	高杯 土師器	B (5.0)	脚部の破片。脚部はハの字状に開く。	脚部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色 普通	P57 10% PL8 覆土上層

第111号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区北西部, B3b区。

規模と平面形 長径1.14m, 短径0.97mの楕円形で, 深さは17cmである。

長径方向 N-18°-W

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層に分層され, 堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量

遺物 土師器片3点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第112号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区北西部, B3b区。

規模と平面形 長径0.72m, 短径0.61mの楕円形で、深さは22cmである。

長径方向 N-34°-W

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 3層に分層され、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第113号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区北西部, B3a3区。

規模と平面形 径0.6mほどの円形で、深さは16cmである。

長径方向 N-53°-E

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 3層に分層され、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第114号土坑 (第28図)

位置 調査AIV区北部, A4i区。

規模と平面形 長径1.96m, 短径1.58mの楕円形で、深さは22cmである。

長径方向 N-22°-E

壁 西壁はほぼ垂直に、東壁は緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層に分層され、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小アブロック少量、ローム中アブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片16点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

第115号土坑 (第27図)

位置 調査AIV区南東部、B4j区。

規模と平面形 径0.60m程の円形で、深さは15cmである。

長径方向 N-2°-W

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 平坦である。

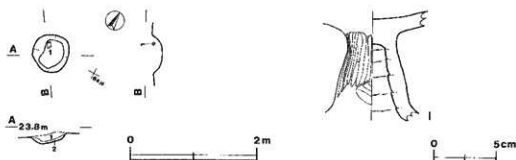
覆土 2層に分層され、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片10点が出土している。第27図1の高坏の脚部片が覆土中層から横位で出土している。

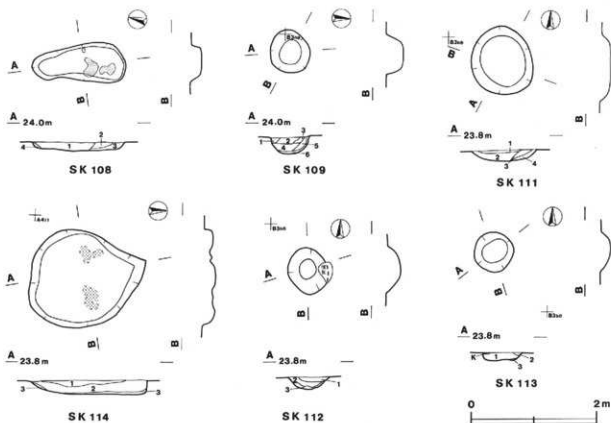
所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



第27図 第115号土坑・出土遺物実測図

第115号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第27図 1	高坏 土師器	B(8.7)	脚部の破片。脚部は中量で、わずかに影をもつ。	脚部外面へう覆り。内面ナデ。	砂粒・炭石・雲母 明赤褐色	P58 30% 覆土中層 PL8



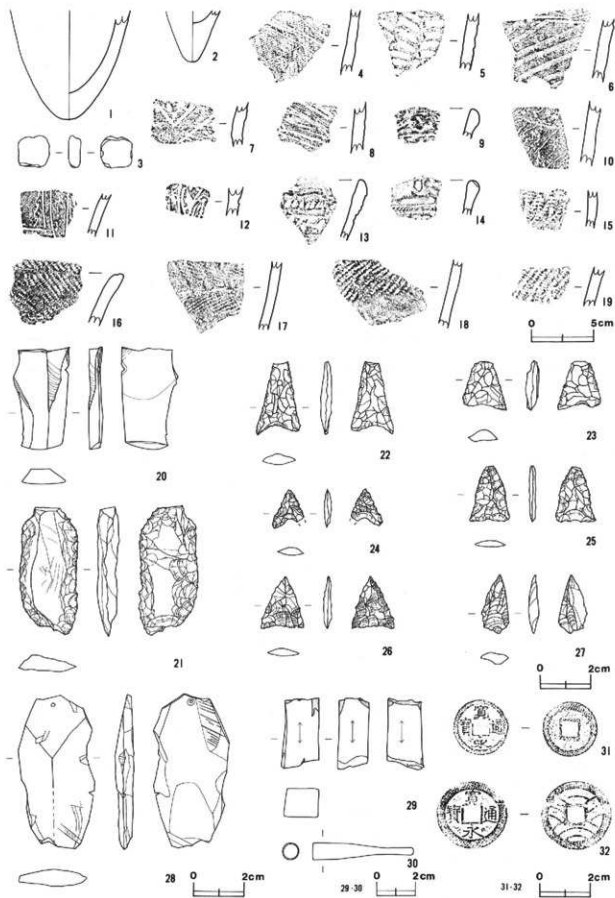
第28図 第108・109・111・112・113・114号土坑実測図

表3 実殺寺子遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ・広さ (長さ・幅・深さ (m))	深さ (cm)					
103	B4gr	N-SW-W	楕円形	1.34×1.14	33	外傾	平坦	自然	土師器 (高坏・不明石器)	古墳時代中期
104	B3ho	N-4E-E	楕円形	2.67×1.63	10	緩斜	凹凸	人為	土師器 (高坏・横・甕)	5世紀第2西半期
105	B3hu	N-2E-E	楕長方形	2.83×1.62	10	緩斜	凹凸	人為	土師器 (坏・高坏・横・甕)	5世紀第2西半期
106	B3hu	N-6E-W	方形	2.33×2.17	11	外傾	平坦	人為	土師器 (坏・高坏・横・甕), 土玉	5世紀第2西半期
108	B3ie	N-1E-W	楕円形	1.47×0.58	26	緩斜	平坦	人為		
109	B3hu	N-6E-E	楕円形	0.70×0.63	26	緩斜	平坦	人為	土師器片	古墳時代中期
110	B3hu	N-1E-E	楕円形	1.31×0.77	32	外傾	傾斜	人為	土師器 (高坏)	古墳時代中期
111	B3bu	N-1E-W	楕円形	1.14×0.97	17	緩斜	平坦	自然	土師器片	古墳時代中期
112	B3bu	N-3E-W	楕円形	0.72×0.61	22	緩斜	扇状	自然	土師器片	古墳時代中期
113	B3aa	N-SW-E	円形	0.63×0.61	16	緩斜	皿状	人為	土師器片	古墳時代中期
114	A4i	N-2E-E	楕円形	1.56×1.58	22	垂直	平坦	自然	土師器片	古墳時代中期
115	B4j	N-2E-W	円形	0.68×0.57	15	緩斜	平坦	自然	土師器 (高坏)	古墳時代中期

5 遺構外出土遺物

当遺跡からは、遺構に伴わない土器や、土製品、石器、石製品、古銭、煙管が出土している。ここでは、それらの出土遺物のうち、縄文土器片16点（早期5点、前期11点）について解説し、その他については、実測図（第29図）と観察表で報告する。



第29图 遺構外出土遺物実測図

4～6は深鉢の胴部片で、沈線により文様が施されている。田戸下層式土器に比定される。7は深鉢の胴部片で、沈線及び円形刺突文が施されている。鶴ヶ島台式土器に比定される。8は深鉢の胴部片で、胎土に繊維が含まれ、条痕文が施されている。茅山下層式土器に比定される。9は口縁部片で、浅い沈線が施されている。10～12は深鉢の胴部片で、地文は捺糸文である。浮島I式土器に比定される。13, 14は深鉢の口縁部片で、変形爪形文が施されている。15は深鉢の胴部片である。貝殻腹縁による波状文が施されている。浮島II式土器に比定される。16は深鉢の口縁部片で、単節縄文LRが施されている。17～19は深鉢の胴部片で、単節縄文が施されている。下小野・粟島台式土器に比定される。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	深鉢 胴土器	B(8.6)	底縁から胴部の破片。矢底。無文。	石英・雲母・砂粒 にふい黄色 普通	P65 5% PL9 (田戸下層式)
2	深鉢 縄文土器	B(4.0)	底部の破片。矢底。無文。	長石・石英・スコ リア にふい黄褐色 普通	P66 5% PL9 (田戸下層式)

図版番号	器種	計測値				現存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	土器片断	2.5	2.5	0.9	(7.30)	95	無文。	DP12 PL9

図版番号	器種	計測値				材質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
20	剥片	4.1	2.3	0.6	5.20	頁岩 Q26	PL9
21	削器	5.1	2.3	0.8	10.00	チャート Q27	PL9
22	石鏃	(2.8)	1.7	0.45	(1.70)	安山岩 Q28	一部欠損 PL9
23	石鏃	(1.8)	1.7	0.45	(1.34)	安山岩 Q29	一部欠損 PL9
24	石鏃	1.5	(1.3)	0.3	(0.33)	チャート Q30	一部欠損 PL9
25	石鏃	(2.2)	1.6	0.25	(0.78)	チャート Q31	一部欠損 PL9
26	石鏃	2.1	1.7	0.3	(0.88)	チャート Q32	PL9
27	石鏃	2.3	1.2	0.4	8.85	チャート Q33	未製品 PL9
28	石製網道具	(6.2)	(3.1)	0.7	(16.00)	滑石 Q34	一部欠損 削形品 PL9
29	砥石	(3.8)	2.0	1.6	(18.00)	凝灰岩 Q35	欠損 PL9

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
30	燧管	(5.3)	0.9	0.9	(3.98)	真鍮	c区 M4	PL9

図版番号	名称	初発年	出土地点	備考
31	寛永通寶	1737年	AIV区東部	M5 PL9
32	寛永通寶	1768年	C区	M6 PL9

第4節 まとめ

今回調査したAIV区からは、古墳時代中期の竪穴住居跡4軒、方形竪穴状遺構1基、方形周溝墓2基、土坑11基及び時期不明の土坑1基が確認された。当区の集落は、平成7年度から調査されたAⅠ～Ⅲ区と同じ台地上にある、南北に広がる同一集落の一部である。集落に隣接して2基確認された方形周溝墓は集落と同時期のものである。また、付近の住居跡と土坑からは、祭祀行為の跡が確認された。ここでは、これらの遺構の特徴をふまえて集落跡の性格について触れ、まとめたい。

住居跡について

第53号住居跡からは、石製構造物の剣形品2点、双孔円板1点、白玉11点、管玉1点、勾玉3点が、床面及び床面から数センチ上部の覆土中で検出された。勾玉は丸みのあるものと扁平のもので、丁寧な整形が見られる。石製構造物の出土から、祭祀行為が行われた可能性がある。

第54号住居跡は、調査区北部で第2号方形周溝墓に隣接した位置にあり、当遺構の南西コーナーの貯蔵穴横の床面で粘土が検出され、その粘土上から埴が、横の床面から碗がそれぞれ横位で出土した。ほかに第55号住居跡と第56号住居跡からも少量の粘土が検出されたが、第54号住居跡と同様の土器の出土状況は見られない。また、第54号住居跡からは、埴が4か所検出された。1軒あたりの埴の数は一般に1か所あるいは2か所であるので、不規則なピットの配置等も含め、当遺跡内では特殊な機能、性格を有した遺構であると考えられる。

方形竪穴状遺構について

第1号方形竪穴状遺構は床に硬化面が無く、使用された痕跡がほとんど確認されていない。覆土の堆積状況を見ると、下層は人為堆積で遺物をほとんど含んでいないが、中間層からは当遺構のほとんどの遺物が集中して出土している。高坏・壺・川が多くは割れた状態で出土し、同一個体の破片が覆土中から検出されていないことから、割れた土器が投棄されたものと思われる。集落内に似た形態の遺構が3基存在し、近接する住居跡と軸線がほぼ同じのものが2基確認されている。住居跡との関連や集落内での役割等興味深い遺構である。

方形周溝墓について

2基確認された方形周溝墓は外径が5mほどで、他の報告例と比べて最も小型の部類である。出土遺物は、第1号方形周溝墓では、溝底面から高坏の坏部と罐が、土層から埴の口縁部片が出土している。第2号方形周溝墓では、溝の覆土中層から小形埴と壺の口縁部及び手捏土器が出土している。

2基の方形周溝墓は互いに隣接しており、主軸方向、規模、遺物出土状況が似ている。埋葬施設は不明である。立地をみると、集落のある台地との比高約1mの谷津に面した北部縁辺部に2基並んでいる。このことから、墓域は、北方向の谷に向かって広がっていたと考えられる。当遺跡における方形周溝墓の立地は、同時期の集落に隣接した台地縁辺部であり、「主要河川の支流沿いやその谷筋などやや奥まったところ」で、「限定された小地⁽¹⁾域内に数基存在するという茨城県内に多く見られる例と同じである。

土坑について

第104～106号土坑は、他の土坑と比べ形態と遺物出土状況等が異質である。平面形は第104号土坑が楕円形、第105号土坑が隅丸長方形、第106号土坑が方形で、東西に並んで確認され、それぞれの遺構から多数の土師器片が出土している。第105号土坑から第24図1の坏が正位で、土床でつぶれたような状態で出土したのは例外的で、ほとんどの土器が人為的に割られたと思われる小片であり、接合する例はわずかである。3基の土坑は、規模、廃棄行為と思われる遺物の出土状況、高坏の個体数が圧倒的に多いという土器の組成が類似している。遺構確認面より上方の覆土中にも土器片が含まれていたことを考えると、投棄された個体数はさらに多かった

と考えられる。それぞれの遺構の出土遺物には、破砕後の煤の付着が見られるものもあり、覆土中からは微量の炭化粒子と焼土粒子が検出された。また、第105号土坑では底面から焼土も検出された。これらの土坑では、焼却廃棄が行われた可能性があると思われる。集落の中でこのような特徴を持つ土坑の数が3基だけだとすると、焼棄行為が恒常的であったとは考えられない。長野市の石川条里遺跡でも類似した遺物の出土状況の土坑が確認され、祭祀との関連において報告されている。今回までの当遺跡の調査では、発掘調査の区域が限定され、他に、同様の遺構の存在も考えられるが、焼棄行為が一時的なものとして想定するならば「祭祀終了後の廃棄の所産」の可能性も考えられる。

第115号土坑では、覆土中層から高環が横位で出土した。当区東側で隣接するAⅡ区でも、同規模で、同様に高環が覆土中層から、横位で検出された土坑が1基、高環が覆土中層から検出された土坑が2基、埴と埴が覆土中から検出された土坑がそれぞれ1基ずつ確認された。このことから、当区の第115号土坑の遺物出土例は例外的なものではなく、集落内の屋外のいくつかの土坑で、同様の意図で、何らかの祭祀行為が行われていたと思われる。

次に遺跡の時期の問題を考えてみる。遺物の土師器を見ると、器種構成に環が含まれること、口縁部に段を有する埴が見られること、高環の脚部にはへら磨きに加えへら削りも見られるようになること、高環の出土量が相対的に多いことなどから、櫻村直行氏の編年によればⅡ期に相当するものと考えられる。

以上のことから、当遺跡は5世紀第2四半期頃の集落跡及び集落に隣接した基城で、集落内では祭祀等が行われていたことが明らかになった。遺構相互の祭祀等の関連については、当調査区域を見る限り、遺構間の遺物の接合関係がなく不明である。

註

- (1) 塩谷修「茨城県の方形岡溝墓」『関東の方形岡溝墓』同成社 1996年12月
- (2) 市川隆之「石川条里遺跡」『中央自動車道長野総理庁文化財発掘調査報告書15』長野県教育委員会 1997年3月
- (3) 註(2)に同じ。
- (4) 櫻村直行「和泉式土器編年考-茨城県を中心として-」『研究ノート5号』茨城県教育財団 1996年6月

参考文献

- ・茨城県教育財団「牛久北部特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第101集』 1995年9月
- ・茨城県教育財団「牛久北部特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』 1996年3月
- ・茨城県教育財団「牛久東下根特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡半人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第113集』 1996年6月
- ・山岸良二編集『関東の方形岡溝墓』 1996年12月
- ・山岸良二「方形岡溝墓」『考古学ライブラリー8』ニューサイエンス社 1981年5月
- ・立花実「推論・方形岡溝墓の立面形態」『西相模考古第2号』 1993年9月
- ・太田文雄・安井健一「石湯遺跡」『千葉県文化財センター調査報告第255集』 1994年6月
- ・伊藤修一・中鉢賢治・小林孝志「瀬名遺跡Ⅰ(遺構編Ⅰ)」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第40集』 1992年3月
- ・小出義治「祭祀と土器」『土師器と祭祀』雄山閣 1990年12月

写 真 图 版



実穀寺子遺跡遠景(南から北方向を望む)



実穀寺子遺跡AV区全景



第53号住居跡



第54号住居跡貯藏穴遺物出土状況



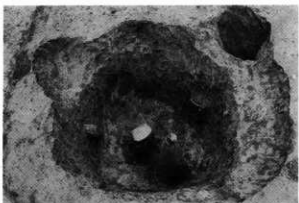
第53号住居跡遺物出土状況



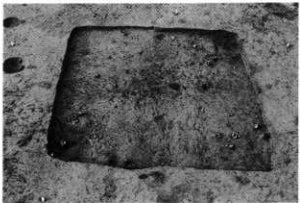
第55号住居跡遺物出土状況



第54号住居跡



第55号住居跡貯藏穴遺物出土状況



第54号住居跡遺物出土状況



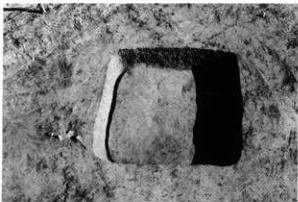
第56号住居跡



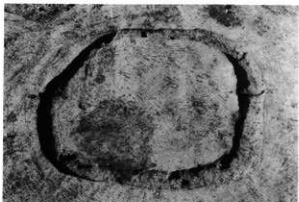
第56号住居跡遺物出土状況



第1号方形周溝墓遺物出土状況



第1号方形壁穴状遺構



第2号方形周溝墓遺物出土状況



第1号方形壁穴状遺構遺物出土状況



第104号土坑遺物出土状況



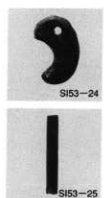
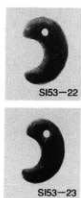
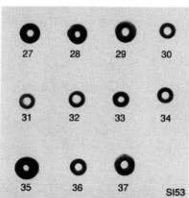
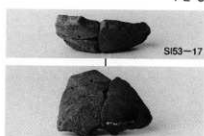
第1号方形周溝墓



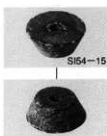
第105号土坑



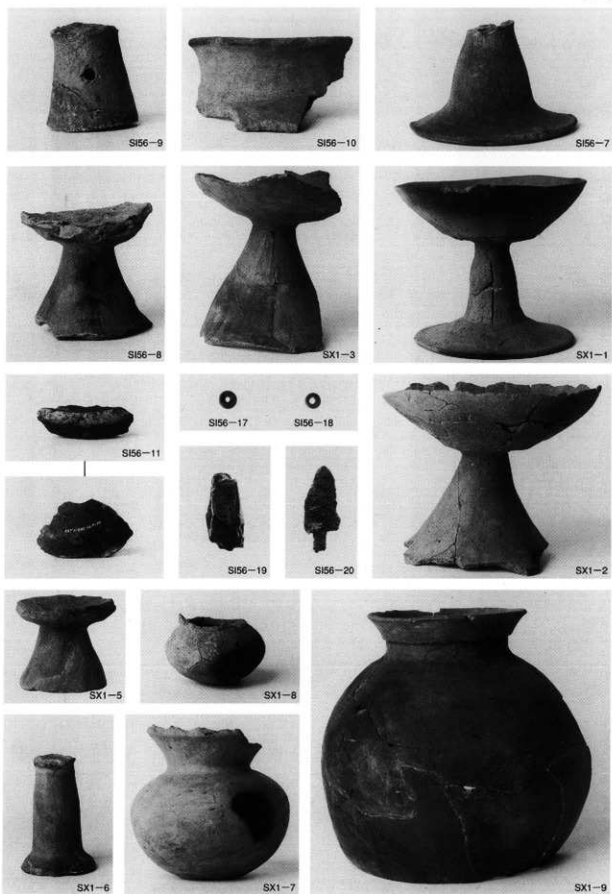
第53号住居跡出土遺物



第53・54号住居跡出土遺物



第54・55・56号住居跡出土遺物



第56号住居跡・第1号方形竪穴状遺溝出土遺物



TM1-2



TM1-1



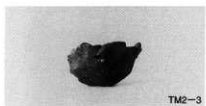
TM1-4



TM1-3



TM2-1



TM2-3



TM2-2



SK103-1



SK104-1



SK104-2



SK106-2



SK104-3



SK105-1



SK110-2



SK106-1



SK110-1



SK115-1

第1・2号方形周溝墓・第103・104・105・106・110・115号土坑出土土遺物



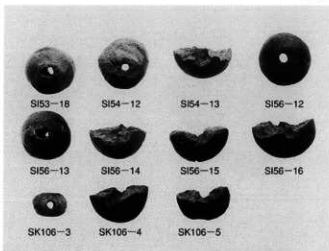
遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3



SI53-18

SI54-12

SI54-13

SI56-12

SI56-13

SI56-14

SI56-15

SI56-16

SK106-3

SK106-4

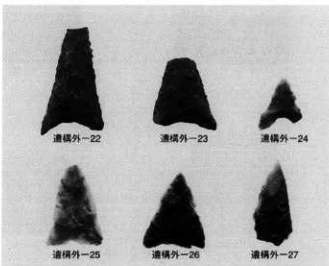
SK106-5



遺構外-20



遺構外-21



遺構外-22

遺構外-23

遺構外-24

遺構外-25

遺構外-26

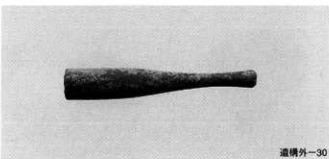
遺構外-27



遺構外-28



遺構外-29



遺構外-30



遺構外-31



遺構外-32



遺構外-32



遺構外-32



遺構外-4



遺構外-5



遺構外-6



遺構外-7



遺構外-8



遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12



遺構外-13



遺構外-14



遺構外-15



遺構外-16



遺構外-17



遺構外-18



遺構外-19

茨城県教育財団文化財調査報告第151集
荒川本郷地区特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書II

実教寺子遺跡2

平成11(1999)年3月16日印刷

平成11(1999)年3月19日発行

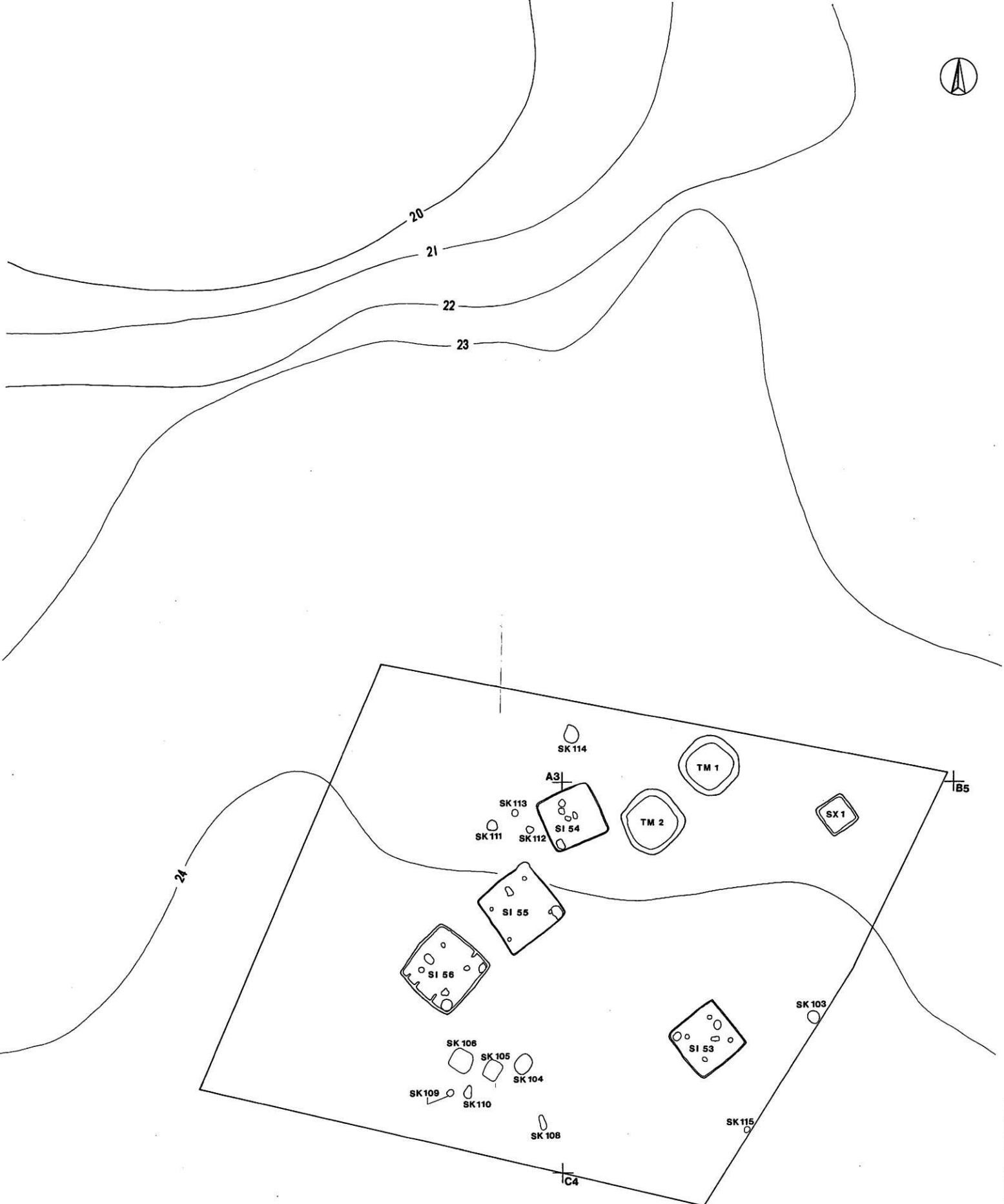
発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社きと印刷所
〒310 0913 水戸市見川町2558-21
TEL 029-241-2525

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第151集

実穀寺子遺跡A IV区



付図 実観寺子遺跡AIV区全体図

